
Alice,

清瀬 柚李

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Alice,

【Nコード】

N4774H

【作者名】

清瀬 柚李

【あらすじ】

アリスの消えた国。女王は気違い、白兔は自らの心を偽り続ける。チェシャ猫は国の為に国を欺き、帽子屋は慰め続ける。そして片思いの連鎖を繰り返す悲しい王国に穏やかに訪れる崩壊の危機

プロローグ 赤の女王

白い息を吐き出す

赤い唇。

赤い瞳。

豊かな黒髪は艶やかに緩やかに波打つ。

雪のように白い頬。

美しい曲線美で構成された体。

何処か憂いを帯びた瞳に見詰められれば

美の神でさえ裸足で逃げ出すだろう――。

その気になればどんな男でも簡単にオトせるだろうに。

それをしない謙虚さがまたいい。

これが世の男共に耳打ちされた我が女王閣下の評価。

流石は我が国の象徴、と鼻が高いのが普通なら僕はとつくに常識から外れてる。

女王を誉められて

嫉妬するなんて。

同時に僅かな優越感に浸る事が出来る。

彼女はオトさないのではなく、オトす必要が無い。

正しくはオトす気なんて無い。

彼女が見詰め続けるのはただ一人。

今も昔も
——アリスだけ。

第一章 女王様は憂鬱（前書き）

女王様↓じょうおうさま

女王↓クイーン

と読んで下さい（ ）

第一章 女王様は憂鬱

麗しき女王様。

敬愛なる女王様。

貴女こそが全て

どうぞご命令を。

お昼下がりのアフタヌーンティー。

この薔薇畑で過ごすのが彼女のこだわり。

彼女は我が国の女王様でなかなかの暴君だ。

「カノン」

「はい」

落ち着いて凜とした声。

「お茶がぬるいです。取り替えて頂戴」

「は…。失礼致しました」

温かなお茶を新しいカップに注いで差し出すと

「ありがとう」

と静かに紡がれる言葉。

恭しく頭を下げて一歩退がる。

書類に目を通しながら角砂糖を二つ。

ティースプーンが縁に当たって高い音を響かせた。

一口飲んで口を開く。

「カノン、今日の予定は？」

「はい。午後3時よりウィルス興の訪問が御座います」

「…ウィルス？」

「はい」

小さく舌打ちしたのを無視する。

ふと昔の記憶と被った。

僕が城にやって来たのは10歳の時。

15歳まで徹底的に執事としての技術・心得を叩き込まれた。

それはもうキツくて辛くて何度も逃げ出したりした。

大人になるにつれそれも無くなったけど。

昔、まだまだガキで世間知らずだった僕はエース様に聞いたことがある。

「つらくないですか」と。

エース様は珍しくきょとんとして、それから僅か笑って小さく舌

打ちをした。

答えは悲しげな笑顔だった。

エース様の舌打ちは、自分が都合の悪い時の癖だと気付いたのはエース様の執事になってからだが。

僕より一つ年上の女王様。

彼女は悲しく無かったのだろうか。

彼女は寂しく無かったのだろうか。

一人の姫君として生きてく無かったのだろうか。

そう思うたびにあの舌打ちがちらついた。

「カノン」

「…っはい」

いけない。

ついほんやりしてた。

「戻ります。付いてらっしゃい」

「かしこまりました」

エース様の椅子を引いて使用人を呼ぶ。

片付けを命じて日傘を掲げる。

「…この後は？」

「3時より南の隣国ウィルス興の訪問がございます」

「そう」

相変わらず優美な後ろ姿を眺めていた。

3時になってもウィルス興が現れない

エース様は遅れが嫌いだ。

何事においても遅れる事は許さない。

もちろん、遅刻なんて論外。

―ちなみに僕は常に1時間前行動だ。―

故にエース様は酷くご立腹だった。

「くそっ。ウィルスはどうしたっ」

苛立たしげに舌打ちするエース様をはしたないです、と宥めて時計を見やる。

予定を大幅にオーバー。

こりゃ完全に見捨てられたか。

こっそりのため息をこぼすてしいると

不意に皇接間の扉が開いた。

「お待たせしてすまない」

エース様の瞳が怒りに燃えた。

「ウィルスウウウ！貴ッ様アアアアア！！」
着いて」

「エース様、落ち

ガタン、と音を立てて立ち上がるエース様を必死に宥めて椅子に座らせる。

「お話だけでもお聞きになっては…」

「誰が聞くんかっ！」

私がどれだけ待ったと思っているっ！貴国との交流は今後一切禁止させて貰う」

「エース様…」

…なんだか今日は厄日だ。

不機嫌ながらも席に着いたエース様の隣でようやく一息吐いていると、ウィルス興が話始めた。

「本日は遅れて誠にすまない」

「やけに遅かったな」

無愛想に返すエース様に苦笑して来客用のソファを勧める。

ウィルス興はもとから小柄だったけど今日はやたらに小さく見える。

「さてエース殿」

ウィルス興が深く被った帽子を脱いだ。

金髪の下の円らな瞳。

彼はそんな物持っていない。

ウィルス興は金髪の下の切れ長の瞳を素早く瞬くのが特技なのだから。

「初めまして、エース殿」

にっこりと笑いかけてくるのはどう見ても少年。

「貴様、名を名乗りなさい」

「名を尋ねるならまず自分が名乗るべきでしょう？」

円らな碧眼が笑っている。

癪だか相手が正論だ。

「私はカノン。此方のエース女王様にお仕えする執事です」

「執事さん？へーっ。なんか白兔みたい」

「白兔？」

エース様が口を挟んだ。

「そう。不思議の国のアリスに出てくる白兔さん」

くすくすと笑う。

「で、貴女が女王で、外に五月兔と眠りねずみもいたね」

唄うように。

「で、僕がアリスだ」

いきなり立ち上がり、胸に手を当て深く頭を下げた。

「我が名はアリーリス。東の果てより参りし旅人。
今日^{こんにち}はかのウィルス興のご不幸により参り使った」

しん、と空気が張りつめる。
エース様が口を開いた。

「…不幸、とは？」 「落馬されました」

あー…と呟いた僕に笑いかけ、アリーリスは包みを出した。

「こちらはウィルス様手作りのアップルパイと苺のショートです。
…召し上がりますか？」

「頂こう」

速答したエース様をくすりと笑い、ケーキを差し出す。

「お願いしても？」 「…喜んで」

にっこりと笑えば白兎はそんなに怖くないよーと失礼な事を言う。
…つくづく面倒な旅人が来たものだ。

こっそりとため息を吐いた。

——これが僕らとアリスの出逢いで、
これが僕らの終焉の始まりだった。

「エース」

「女王様、お茶会しようよ」

「うるさい。私は忙しいんだ。カノン」

「はい」

「摘まみ出しておけ」 「はい」

「え？ ちょ、ええー…」

アリスが城に住み着いて早くもひと月。

アリスを引き摺って中庭まで追い出すのが僕の日課になりつつある。

アリス、とは自称旅人のアリーリスの愛称。

別にそこまで仲良くしている覚えはないが、「いちいちアリーリス、って呼ばれるのも面倒だから」とアリーリスが提案した結果だ。

本人としては、彼曰く「男らしい」響きの「アース」と呼んで欲しかったらしいが、「アリス」で定着した。

「ねえ、うさぎ君」

「…それ止めてください。一応僕の方が年上なんですよ」

「それホント？」

「…さあ」

「ならいいじゃない」

からからと笑う自称旅人を軽く睨み付けて、ため息を吐いた。

「ため息？ 幸せ逃げちゃうよー」

「誰のせいだと思ってるんです？」

「ん？ 僕？」

「よくお分かりで」

確信犯か。全く性質が悪い。

「……………。うさぎ君」

「だから止めなさい」

「今、幸せ？」

何を聞くんだろう。この旅人は。

「幸せ、って……」 「幸せか、って聞いてるんだ」

低い声だ。

いつもの軽い響きがない。

深く、甘さがない。

それなのに、何処か慈悲深い響き。

まるで、女神に愛でられた紅薔薇のよう。

——なんて事を考えたのはきつと、昔に読んだ古い神話のせい。

「幸せです」

アリスが目を見張る。

意外だったらしい。

「僕はエース様に仕え、日々エース様のお側でサポートが出来る。これはとても幸せです」

アリスが目を細め、にやりと笑った。

「うさぎ君、いや。カノン」

珍しくちゃんと呼ばれた名前に驚いて、足を止めてアリスを凝視していたら、笑顔は苦笑に変わっていた。

「エース殿が好きでしょ」

「な……っ」

何を言うんだこいつは。

冷静な頭とは反対に、表情はかなりの反応を示したらしい。

「なに？もしかして凶星い？」

楽しそうにニヤニヤ笑うアリスを中庭に放り込んで、早足に執務室に戻った。

中庭からチズとロメの声がしたが、無視して流した。

ちょっと番外編★ 誤字訂正致します★（前書き）

タイトル通り誤字訂正します（

これから気をつけますので（汗

ちょっと番外編★ 誤字訂正致します★

「…ん？」

アリス掃除の途中でアリスの手元に目を止めた。アリスが何やら手紙を書いている。

どうやら昨日お茶会でお世話になったミリア卿へ感謝状らしい。ふと違和感を感じた。

僕だって一応文系だ。

「アリス」

「んー…？ 僕今忙しい…」

「字が違います」

「へ？ うっそ。……。カノンってこれ読めたっけ？」

指指すのは異国の文字。

「エース様の執事なので。教養の内です」

それはもう怖いくらいに叩き込まれた内に通訳も入っていたから。なんてあえて言う事も無いだろう。てか言いたくない ふうん、とさして興味もなさそうに視線を紙に落として上から舐めるように動かして行く。

「どこ？」

「ここ、“興”じゃなくて“卿”です」

「うっそ」

「嘘は滅多につきません」

「たまにはつくんだ？」

言葉尻を捉えてからかいにくるアリスの頭は意外に文系なのかもしれない。

「アリス」

「んー？」

「エース様がお呼びです。割れた窓ガラスの件についてだそうです」
「げ」

そこら辺は上手いことまいいてよ、と口を尖らせるアリスを促す。

「あ、カノン」

「なんでしょう」

「帰ってきたら、お茶の用意してくれる？」

「…畏まりました」

「ついでに愚痴も聞いてくれると嬉しいな」

「…畏まりました」

ひらりと手を振ってドアの向こうに消えたアリスに長いため息を吐く。

「さて」

僕は僕の仕事をするとうしましょう。

親愛なる女王の為に。

「カノン」

翌日。

エース様お気に入り^の紅薔薇に水をやっていたら、アリスがエース様を引っ張っているのが見えた。

少し遠いから聞こえないけど、何やらアリスが一方的に連れ回しているらしい。

^{あるじ}主の危機に僕は動かざるべきを得ない訳で、ホースを置いた。

「エース様あ、お茶しようってー」

「だから私は忙しいんだ。何度言えば分かる。本来旅人は賢い生き物じゃないのか？」

「基本的にはね。僕も例外じゃないけど、旅人にはもう一つ共通点があるんだよ」

「何だ？」

「美しい女王とお茶するのが大好きなの」

「ほざけ」

「ひっど。まあ強制連行だけどねー」

ちなみにエース様は書類から顔を一切上げない。

今日は珍しく白いお召し物で（エース様曰く、白は着ていると目がチカチカするらしい）引き摺った裾が皺になってしまっている。

全く。アリスは自由な奴だ。

「エース様」

僕の声^にエース様が顔を上げた。

緩く巻かれた黒い髪がゆらゆらする。

「…あれ。エース様？」

「なんだ」

「髪、巻いてらしてましたか？」

「カノン、なんか言葉おかしいよ」

文系何じゃないの？ ああ、びっくりしちゃった？

くすくすアリスが笑う。

正直、びっくりした。

あんまりエース様が綺麗だから。

あんまりエース様が嬉しそうにしてるから。 基本的に仏頂面をしてるエース様だけど、僕だって伊達に執事をしてない。

ミリ単位、雰囲気単位でエース様がいつもと違うのはすぐ分かった。

でも嬉しそうなのは意外だった。

いつもは緩やかに波打つ黒髪は、内側に巻いている。

「…カノン？」

怪訝そうな顔で眉を寄せる。

「見とれちゃった？」

「なッ」

「顔まっかー」

からから笑うアリスを若干睨みながら顔を背ける。

「あつれー？カノン顔赤くなぁい？」

ジュノが中庭からひよっこり顔を出した。

「うるさい」

「アリスになんかされた？…おー、エースが髪巻いてるー」

「エース様に失礼だぞバカ猫」

「バカ猫じゃないわよ鉄仮面兔。化け猫よ。

で？どーして執事サマの顔が赤いのでしょうか？

ついでにエースサマ、よくお似合いですよー」

なんか豪華で女王っぽい、と言う発言は頭を失礼して黙らせた。

「そういえば、どうしてジュノがいるんだ？」

「ん？あたしは非番。アリスが誘ってくれたの」

行基悪くベリータルトを頬張りながら答える。

僕らは結局エース様からメイドまで全員でお茶会をしていた。

城の中は静かな物だ。

例外として厨房と紅薔薇畑を除けば。（料理長を筆頭に調理人達

は大急ぎでケーキやらスコーンやらを焼いてくれている。彼らは元々お祭り好きだ）

アリスの要望をあつさり受け入れて、休憩中だった料理人達を馬車のようにこきつかっているのは意外な事にエース様で、みんな目を白黒させながら、でも何処か楽しそうにお茶会を楽しんでいる。

普段殺伐とした雰囲気のある城だけに、賑やかで活気のある今の状況はちよつと面白い。

普段使用人達と接さないエース様にとってもいい機会になっただ

ろう。

「うえ。これお酒入ってるー」

ガトーシヨコラを口一杯に頬張ったアリスが苦い顔をする。

「んー？…ああ。これラム入ってるわ。お子ちゃまが食べちゃだーめ」

残りを一口食べたジュノがにんまりと口角を上げた。

お気に召したらしい。

「エースも無理だったらちょーだい。食べたげるから」

「結構だ。…第一、私はお前より年上だ」

「あれ？そうだったけ？」

あたしの方が発育いーからすっかり忘れてたわ」

「ジュノ」

「止めろカノン。」

…雰囲気崩す気か」

「…御意」

ジュノが感心したように声を漏らした。

「すごい。完全服従なのね」

「当然だ。この暴れ馬を私が乗りこなせなくてどうする」

「エース様…」

「暴れ馬だってよー、良い子のカノンくん」

笑い転げるジュノは放っておいた方が懸命だ。

…エース様が笑っている。珍しい。

「…何の騒ぎでしょう」

「ハーノールベルか。お前も少し飲んでいたらどうだ？」

「いいえ。本業が残っております故」

「そうか」

「失礼致します。親愛なる閣下。

執事殿。手伝って頂きたい」

「ああ、はい」

地に響くような低い声で静かに喋る彼はハーノールベル。自称医者だ。

主に定期健康診断と医薬品の補充にたびたび訪れる。

「執事殿。お茶会ですか」

「ええ。アリスが、…紹介がまだでしたか？」

「ええ」

「旅人です。城に住み着いた」

「ほう」

「そのアリスがエース様を引っ張ってきて、お茶会を始めたものですから。大規模になってしまっ

「賑やかで大変宜しい」

「まあ、そうなんですけど」

「何か」

「いえ。…最近、エース様から棘が無くなったな、と」

「ほう」

「…喜ぶべきでしょうか。僕は」

「さあ」

「さあ、つて…。

随分曖昧ですね」

「左様で」

「……。此方です。

毎度毎度、ありがとうございます」

「いえ」

「帰りの道案内はありますか？」

「いえ。いずれたどり着くでしょう」

「…そうですか。

それでは失礼致します」

「どうも」

僕は彼が苦手だ。

理由は特に見つからないが、苦手だ。

たぶん、彼独特の雰囲気とか声とかに圧倒されてしまうからだ。

これからお茶会が終われば片付けをするであろうメイド達の指揮を執らなくてはいけない。

執事とて、忙しいのだ。

赤い瞳に金の髪。

故郷で神の子と崇めたイカれた大人達から僕を連れ出してくれたのはエース様だった。

地位も名誉も投げ出して、自由に生きる方法を教えてくれたのもエース様だった。

あれからエース様は僕の全てだった。

だからこそ、僕は思う。

国の為に人生を捨てて、ただひたすらに女王として背筋を伸ばして平等に、冷静に世界を見渡してきたエース様がアリスによって少しずつでも少女らしさを取り戻すべきなのだろうか。

僕は思う。

いったいどれが

エース様に一番いいのだろう、と。

「ジュノ」(前書き)

微妙に処刑あります。

無理な方はご遠慮下さい。

苦情なんかは来ないレベルだと思いますが。

「ジュノ」

不思議の国のアリスになぞるとチェシャ猫に当る僕の幼なじみ。

「なあにシケた面してんの。執事サマ？」

「…ああ、ジュノか」

天然の赤毛を頭で一纏めにしたパンツスーツの（呼びたくないが）女性。

彼女がジュノ。

軽薄で頭の軽い馬鹿なクセに頭はキレる。

特に、悪巧みに関しては一級品だ。

ついでに言うと言を惑わす「妖花」と通り名が付くほどの美人らしい。

城に迎えられた辺りから一緒に居たから、コック曰く「アンタの美人の基準は高すぎる」らしい。

「仕事帰りか」

「アンタはフラられた帰りか」

「…はあ？」

「エースサマ。アリスがべったりじゃないの」

からから笑う。

全く、顔は良いのだから淑やかにしていれば好きなだけ男が寄ってくるだろうに。

「オシトヤカに、ねえ」

くすくす笑う。

笑いの幅が広い奴だ。

「あたしがオシトヤカにしたら、アンタはあたしを選んでくれる？」

顔を近付けてくる。

にやり、ともにこり、とも言えない色気のある挑戦的な微笑み。

こいつは他国を制圧する為にエース様が使う情報を掴んでくる、所謂国家スパイ。

育ちの悪さを全面に表した

「素」を隠す為に使うこいつの演技は完璧だ。

その反動か、普段は素を全面に惜し気もなくさらけ出している。

「∴俺にはエース様だけだ」

「そのエース様に相手にされて無いのは何処のどなた？」

睨み付けても金の瞳の揺らがない事揺らがない事。

これだから幼なじみは扱いづらい。

「∴あたしにしときなよ」

軽く目を細めたジュノの唇が深く弧を描く。

僕も笑い返し、身を屈める。

吐息が重なる程近くに、ジュノがいる。

長い髪がするりと指を通り抜ける。

「お前が捕まったら、迎えにいつてやるよ」

「冗談」

ふふふ、と今度は少女のように無邪気に笑って小首を傾げる。

「馬鹿じゃないの？」

「笑顔で毒を吐くな、猫被り」

「あたし猫だもの」

ずっと身を退いて踵を返す。

ごきげんよー、と右手をひらりと振ってヒールの音高く去っていく姿だけは

それなりにイイ女なのだと認めよう。

前髪を掻き上げて何か言った気もするが、小さすぎて聞き取れなかった。

弱味でも掴んでおかないとアイツは使いこなせない。

「全く……」

少し品が無いが、気分的に前髪を掻き上げてみる。

「あ、あのう……」

「はい。……えーと？」

蚊の泣くような声に振り返ると、一人のメイドが顔を真っ赤にして俯きがちに立っている。色気に当てられたか。

たしか、まー、

「メイド研修生の、ま、マリーと申します」

そうそう。マリー。

小柄で黒髪を三編みにした大人しい研修生。

たしかジュノが可愛い可愛い、と大層気に入っていた。

恥ずかしがりやで純情でドジっ娘で伊達眼鏡かけると可愛いすぎるのよ！

と騒いでいたからよく覚えている。

「何か？」

「はい、えと…女王様が、帰りがおせ、いえ、遅い、とおっしゃったので、探しておりま、した」

…彼女は田舎暮らしらしい。

懸命に話す姿は可愛らしいが、緊急の時は怒鳴ってしまうかもしれない。

…教師でも呼んでみるか？

「そうですか。どうもありがとう」

「いえ。：そのお荷物、私がかたずけておきます。
女王様の所へどうぞ」

「場所、分かりますか？それに結構重いですよ？」

「はいっ。道覚えるのは、特技ですから。それに、重い物は慣れます」

にっこり笑われると、此方が癒されそうだ。

なるほど、ジュノはこう言うのが趣味か。

「じゃあ、頼みます」

はいっ！

ぺこりと頭を下げて足早に駆けていく。

あーあーあー：

転びそうだなあ：

：危な。

でも愛されそうな娘だ。

ジュノとはまるで正反対だな。

ジュノは孤児だ。

僕は孤児では無いが、親から逃げてきた。

昔、超有名盗賊団があった。

その盗賊と言うのも、男子禁制の女の園こと

「盗賊団・C a t s c h i p」

盗賊と言うより怪盗だ。

優れたコンベネーションで次々に財宝やら遺産やらを盗んでは庶民に配ったり、ドブに捨てたり、そのまま持ち帰ったりとまるで猫の様だと新聞で取り上げられてからと言うもの、猫を描いたコインが標的に届くようになった。

僕が6歳の時に壊滅した、言わば伝説の盗賊団だった。

そのC a t s c h i pとジュノに何の関係があるのかと言うと、ジュノはC a t s c h i pの生き残りだからだ。

ジュノは孤児だ。

ジュノを拾ったのが団長の「ボス」。

悪い孤児の寄せ集めで造られた悪い盗賊団に悪いジュノは直ぐに馴染んだらしい。

思考回路こそいつでも悪巧みを考えてる集団だが、根は誰よりも真っ直ぐな集団だったと言う。

女であることに誇りを持ち、背筋をしゃんと伸ばして、誇り高く生きる彼女達は今でもジュノの誇りだと言う。

そんじょそこの安いオトコじゃあ釣り合わ無いイイ女ばっかししたよ、と語るジュノを放っておくと、軽く3時間は語り続ける。

それくらい、大切な場所だったのだと思う。

ジュノのコードネームは「チェシャ」。

何処か遠い国の言葉で、「希望」と言う意味らしい。

僕は知らないが。

『身が軽くて、美人で無邪気な笑顔を振り撒いてたあたしは Cats chip の希望って言われてた。

みんなが小さいあたしを元氣付ける為に言ってくれたのか、本当だったのか分からない。でも、あたしは嬉しかった。

仲間がいて、ろくに何もできないあたしを、ちゃんと認めてくれたんだって思った』

でジュノの仲間自慢はいつも始まる。

ボスは器の大きい妙齡の女性で

ババコは長老で物知りな中年過ぎのおばさん。

いつも叱ってくれるのは凜としたルイ姉さん。

優しく慰めてくれるミーヤ姉さん。

男前なモノ姉さんに、力持ちなビスカ姉さん。

背の高いビワ姉さんにドジっ娘のマール。

スイル姉さん、クルコ姉さん。

指折り数えながら一人ひとり説明していく姿は初めて出会った時には見れなかった、少女らしさが滲み出ている。

彼女達の最後は僕も知っている。

処刑された。

それだけ。

某国の国宝に手を出し、捕まった。

何人かは逃がされたが、ボスは捕まった。
いや。

自らその場で囚になろうとした。

ジュノは誰かに引っ張られ、逃げ延びた。
大好きな仲間を置いて。

公開処刑の形で行われたボスの最後は、古風なギロチンだった。

仰向けで、青空を仰いで。

最後の最後まで、アジトの場所も仲間の数も、自らの本名まで何一つ語ることなく、逝った。

最後に呟いた「空が青いねえ。…こりゃいい夢が見られそうだ」と言う言葉は暫く世界中で流行り、遺言に引用する人々が続出した。

逃げ延びた者達も捕まり、全員処刑された。

と言うのも、「刑務所で生き恥かき続けるなら死んだ方がずっといい」と揃って言ったからだ。

大盗賊団C a t s c h i pの最後と、団結の強さは世界中の涙を誘った。

後にこの話は書籍化され、全世界で大きな反響を呼んだ。

（この本を3行黙読して投げ捨てたのは他でもないジュノだ）

僕が6歳の時、世界を恨むようなキツイ視線で睨んで来た。

初対面で睨まれてドン引きした僕はジュノと距離を保ちつつ、友達になろうと言う不可能を実現させようとした。

半年経っても自己紹介も出来ずじまい。

ああ、もう駄目だ。
と直感した。

駄目だ。この娘の心は開くことを知らない。

そう悟り、諦めようとした僕にジュノはこう言った。

「アンタ執事？」

あたしここ分かんないんだけど」

ノートを片手にぶっきらぼうに話し掛けてきた。
指差した先は数式。

解けないことは無いが、正確さに欠ける気がして、家庭教師に聞くように促した所。

「アンタ解けないの？…ハッ。女王サマも大変ね。将来こんな無能執事サマがつくなんて」

カチンときた。

「なんだって？」

「あら聞こえませんでした？」

む の う し つ じ サマ」

それから先は頭に血が昇っていて覚えてない。

たしか、ジュノの下で半べそでいたのを家庭教師に救出された覚えがある。

負けたのではない。

女性に手を上げられなかったただけだ。

それがきっかけでジュノは僕をからかうようになり、僕等は幼なじみとして今に至る訳だ。

僕とジュノの中が無駄に深いのは、何か同じ物を感じていたのかもしれない。

執事とスパイ。

道は違えど、僕等はずっとあの時のままでいられると、信じてた。

What is this heart?

穏やかな朝だった。

海こそ無いが天候に恵まれた小高い山の上から麓^{ふもと}までを覆うように存在する国だけに風通しはいい。

故に朝から爽やかな風が窓を抜けて髪を乱す。

小さく二酸化炭素を吐き出しながらちらりと未だに眠りこける旅人を盗み見る。

いつそ無邪気なほど呑気に私のベッドを占領するこいつ。

元はと言えば、ふらりと現れ一方的に世間話をしてきたアリスを無視して仕事を進めていた所、いつの間にか眠りについていたのでわざわざ叩き起こしてカノンに引き渡すのも面倒だと放って置いた結果だ。

完全に私の誤算だ。

そのまま居座られた。

私は眠れそうに無いから別に良いのだが、カノンが煩く言うのは困る。

普段から割りと裏で糸を引いているのはカノンだ。

国家の軍隊やら警察やらをまとめ、指示するのも

隣国との会議やら立食会やらのスケジュール調整やらもカノンがこなしている。

カノンは私よりずっと優秀な人材だ。

私に何があった時は、カノンに後を頼んである。

少しばかり複雑な――もしかしたら悲しい――顔で、それでも「御意」の一言をくれたカノンを私は誰よりも信頼している。

同時に誰よりも苦勞は掛けたくない相手だ。

できればアリスを客間か何かに入れておきたいのだが、カノンに全力で止められた。

私は女王だ。

私は私の意見を通せば逆らえる者はいない。

メイドだろうが、隣国の王だろうが。

しかし、アリスを城に居座らせているのは私の我が儘だ。

そう言う意味ではカノンに一つ借りがある。

だから一つだけ、カノンには逆らえない。

全く。これじゃどちらが主か分からない。

私は、なんと我が儘な奴だろう。

「エース様は我が儘なんかじゃないよ」

「!？」

驚いて振り返れば、アリスが俯せに頬杖をついていた。

「…アリスか」

「おはよ」

ふわぁ、と欠伸を噛み殺す様は平和その物。
しかし猫科の動物にも見える。

「エース様は我が儘なんかじゃないよ。

君が我が儘だと言うなら僕は何？ って話になるよ」

「貴様は…傍若無人だ」

「旅人だからね」

優しい人には意地悪したくなるのさ。

くすくすと笑いを溢す。

「それがどうした」

「ありゃ。冷たい」

ぷう、と効果音が着きそうな程頬を膨らませる。

実に可愛らしい仕草だ。

年相応の子供時代にやるならば。

「貴様、歳を考えられないのか」

「そんな些細な事に捕らわれてちゃ何も見えないよ」

「人として必要最低限な範囲だと思うが」

「まあ、そうなっちゃいますか」

「私が正常で貴様が異常だ」

「あらら、手厳しい」

「それは失礼」

最近習慣と化してきた軽口も日に日に時間が延びている。

私はこんなにもお喋りな奴だっただろうか。

今度カノンにでも聞いてみるとする。

「エース様は我が儘なんかじゃないよ」

本日3度目になるフリーズ。
戯言にしても聞き飽きる。

「君が我が儘だと言うなら、カノンだって我が儘だ。
ジュノも、僕も」

「…アリス、しつこいぞ」

「だって、ヒトだろう？」

「…はあ？」

「ヒトは我が儘だ。」

ヒトは勝手だ。

ヒトは自由だ」

私はとうとう押し黙った。

こいつはまだ寝ぼけているのだろうか。

「カノンも然り（しかり）、君も然り、ジュノも僕も。

でもね、それはヒトだからだ。

ヒトは皆同じように我が儘だ。

問題はそれをどう表現するかって事と結果にある。

それに似た結果で満足するか、その通りで満足するか、それ以上で満足するか。

それは願望によって違うかもしれないけど、君とカノンは似てる」

顔は実に真剣だ。

いっそ、恐ろしい程に。

正気らしい。

「…何が言いたい」

「君もカノンも、遠慮しすぎって事ー」

「私は女王だ。」

女王が好き勝手にしてどうする。国を崩壊させる気か。

第一、革命によって終わるようでは先祖に顔向け出来ぬ。

私は誇り高き『王族の継承者』^{ロイヤル}だ。

：無様な終わり方は出来ない」

「それが君の持論ね」

何処か憂いを帯びたため息と一つ吐いて、体を起こす。

「さてと。そろそろ執事クンが来るね」

「…もうそんな時間か」

また何時ものように隙の無い着こなしでカノンが朝から盛大にため息を吐くのだろう。

2度、ノックが聞こえた。

本日も晴れ。

エース様は珍しく仕事を中断してファッション雑誌を読んでいた。

何事にも休憩は必要だ。

エース様は根を詰めすぎていつ体を壊してしまうか心配だった。

不満なんて無い。

実にいい傾向だと思う。

もともとなのか、あまり睡眠時間を必要としない体質をフル活用して一日中仕事を続けてしまうのはあまり変わらないが、稀に休憩を挟むようになったのも影にアリスの存在がある。

「カノン」

「はい、いかが致しましたか？」

「…買い物に付き合え」

「御意。…：は？」

「なんだ」

習慣で御意と即答してしまったが。

失礼だが、聞き直す。

「エース様。…お買い物、ですか？」

「買い物だ。何が問題があるか」

「いえ、失礼致しました」

珍しいので、とは言わない。

エース様だって僕の一つ上とはいえ、年若い女性だ。
ファッションや美容に興味を持ってもおかしくない。

「でしたら、ジュノを連れていってはいかがでしょう。

僕より何かと詳しいかと」

「そうか。…どちらも付いてこい」

「…：」

「いいな」

「…御意」

さて。明日は雨が降るぞ。

昨日仕事から帰ってきたジュノの部屋は静かだった。
寝ているのだろうか。

国家特殊捜査官たる彼女は実に不規則な生活をしている。

それでも崩れる事を知らない美貌とスタイルは「魔女」と呼んでも過言ではないだろう。

「ジュノ、いるか。ジュノー」

ドンドンと遠慮無くドアを叩きながら少し声を張り上げる。

寝起きの悪さは昔からだ。

「ジュノー起きろー。話があるー」

「なんか間抜けだよ、執事サマ」

背後から現れる。

…そりゃ反則だ。ちよつと恥ずかしいぞ。

「…なんだ。風呂上がりか？」

部屋にもあるだろうが」

「壊れちゃってー」

前にも言ったのにどっかのケチケチ執事サマのお陰で最近は大浴場よ」

「…今度シャワーが届く、と前に言わなかったか？」

「え、うっそ。ホント？ やったー！

あたし純銀がいい」

「赤でも金でもいいが、とりあえず片付けろ。業者も入れない」

「じゃあ、カノン手伝ってよ」

「はあ？ 僕だって忙しいんだぞ」

「あたしだって忙しいわよ」

「今日は非番だろうが。さっさと片付けろ、馬鹿猫」

「無理つつってんの。聞こえない？ イイコぶりっこ執事サマ」

ため息。

これ以上相手にしても疲れるだけだ。

「…で。用件だが」

「なによ。もうおしまい？」

「お前と言い合いをしてても時間が無駄になるだけだ。

また今度時間さえあれば、やぶさかでも無いが」

「ふうん？」

「なんだその目は」

「いやあ？べつつにいい？」

にやにやと、女としていけない類いの笑みを浮かべる。

「…まあいい。

エース様が買い物にお出掛けになる。付き添え」

「えー？護衛い？アンタで出来るでしょ？」

「いや、違う。

僕は護衛だとしても最近の若者のセンスは分からない」

「さっすが仕事人間」

「煩い。そこで、だ。エース様に付いて色々と指導して差し上げろ」

「よーするにいい、エースが色気付いて服やら何やらを仕立て直した
いけどアンタじゃ役不足だからあたし直々にアドバイスしろ、って
訳ね？」

「なんだその一々突っ掛かる言い種は」

「あら？執事サマは神経質なのね」

「……。とにかく、頼む」

「はいはい。了解よ。ちよっと待ってなさい、着替えてきてやるか
ら」

「はあ？…ったく」

「レディをエスコートして下さらないの？」

「お待ちしております、マイレディ」

くすりと笑みを溢して消えていくジュノを見送って約10分。
ようやく出てきたジュノは白い細身のワンピースに黒い七分丈の
ジャケット。

赤い華奢なハイヒールのストラップが絡む足首の細さを強調する。
これなら、エース様を任せても大丈夫だろう。

「お手をどうぞ？レディ」

「よろしい」

少しおどけた様にエスコートを受け入れたジュノの手を引いて、
エース様の待つ馬車へ向かった。

「だあかあら、アンタじゃそのサイズはお召しになれないってば」

「何故だ。裾くらい、少し引き摺ってもがいいだろう」

「違いまーす。身長の問題じゃあなくて、胸の問題デス、むね
の。お分かり？」

「…胸だと？私は胸が無いとでも言うのか？」

「言いますよ。アンタちゃんと召し上がってる訳？」

「食事はきちんと出してる」

「アンタには聞いてませんよ執事サマ。」

「……」

某服屋。もといショップ。

城外と言うことで一応敬語を使うが、ジュノの敬語は微妙だ。
もう一度教育し直されてしまえ。

部下の無礼は王国の信頼に関わる。

マナー、言葉遣い、立ち振舞いから雰囲気まで。

あのマリーでさえ一步城から出れば世間的には立派な淑女だ。

立派な紳士、淑女が集まって、自らを磨きあげて初めてロイアルに仕える権利を持つ。

ジュノも例に漏れず、上の上以上の訓練を受けてきている。

敬愛なる家庭教師マダム・アングレは、さぞ苦勞なさっただろう。今考えても頭か下がる限りだ。

僕はぼんやりと眺めていた。

薄桃の二段重ねのワンピースに、同系色で低いヒールが柔らかく優しい印象の靴。

頭にやや大きめな白い帽子を被り、三面鏡を覗いている。

少し恥ずかしそうに、でも何処か不満なのか表情は晴れない。

エース様だ。

後ろをジュノが通っても気付かないらしい。

一度素通りした。ちらりとエース様を振り返り、暫し停止。

一度店内を見渡して、側にあった装飾品であろう天井からカーブを描き吊り下げられたレースのリボンに手を掛け、店員が静止をかける前にそれを引き千切った。

ぼかん、とする店員に何か囁いて、品定めをする。

赤面した店員がそくさとレジへと戻るあたり、何か外道な手口だ。

その不純な経緯を経た純粋な白のリボンは繊細なレースで構成された目にも柔らかな素材。

それを無情にも所々引き裂いて、穴を広げていくのだから店主は目を剥いた。

まあ、こういう奴だから、僕は気にしないけど。

赤い薔薇の茎を爪の先で潰していく。

一つひとつ丁寧に繊維が殺されていく音がする。

染み出た液を拭き取り、2、3本リボンに通してエース様の防止に緩く結び付ける。

白い帽子にふわふわのリボン。それに映える赤と緑。

エース様が振り返り、ジュノが優しく微笑むフリ。

一見仲の良い姉妹にも見えるだろうが、エース様の方が一つか二つばかり年上だ。

エース様が華奢で、小さく、無知すぎるのか。

ジュノが華奢だが発達が良く、博識なのか。

多分両者だ。

その証拠に、ジュノを淡々と諭すエース様の姿は王家の気品があるし、ジュノは叱られた子供のようにげんなりとしている。

そろそろ止めないと、自称「仕事明けで疲れた体を労れること無

く引つ張られてきたにもかかわらず、女王の服を見立てる健気な国家公務員」が拗ねる。

報告書も出ていないのだから、まだ仕事は終わってない。

「エース様、ジュノ。服が決まったのなら、お支払を」

いくら女王とはいえ、常識は守って頂こう。

「後は二人で回るから」

の一言で、僕は城に帰された。

正確には、エース様の

「カノン。アリスが暴れる前に押さえろ。戻れ」
がとどめになった。

一応ジュノが付いてるとはいえ、何があるか分からない、と食いが下がったが、

「命令だ。カノン、戻れ」
には勝てない。

独り寂しく馬車に乗っている。

ため息を吐く度に、幸せが逃げますよ、とからかわれたが、今はそれも無い。

待たされるのに慣れた、気の長い馬車乗りにもいい加減飽きられるくらい、ため息を吐いていたらしい。

陽気な歌が聞こえる。

でもそれに反して僕の心は、まるで鎮魂歌だ。

獅子は子供を奈落の底に突き落とす。

昔、遠い国の人は言った。

父様、母様。

落とすべき僕は、獅子の子を手放せそうにありません。

ワイルドベリーのためいき

「それでは、よろしくお願い致します」

書類を鞆に詰めて、45度の座礼をする。

にこやかに握手を求めてくる似非紳士の手を似非レディスマイルで握り返す。

手袋をしていても伝わる玄人の手。

流石は軍人さんだこと。

割りと細身の人だけど、手は立派な銃ダコ、剣ダコ。

幹部かしら、なんて考えつつ手を引いて微笑みかけて、サヨナラ。

某ホテルのロビーは広々としていて、ゆったりと流れるジャズに目を軽く細める。

受付嬢に領収書を頼んで、敬愛なる執事サマにお電話。

「あ、もしもし。執事サマですか？

迎えに来て。ん？そうそう、仕事場」

もちろん、敬語で。

エンジンは快調。

空も快晴。

仕事だって順調。

「あたしの人生、順風満帆じゃない？」

「…あまり調子に乗るなよ」

「はいはい、誠心誠意込めてお仕事させて頂いてますう」

「そう言う意味じゃない」

珍しくカノンの声が尖った。

別に怖くないけど、背筋が伸びる錯覚がする。

カノンが、その文系の知識を余すことなく駆使して相手を徹底的に、黙らせる。

あたし自身、何回か経験したカノンの説教は、不思議なくらい正論だけを突いてくる。

「執事」として、ロイヤルに仕える人材を教育する為に、カノンが唯一手に入れた武器だから、

あたしは喧嘩で勝てても
口では勝てない。

「…どういう意味よ」

「別に、お前が失敗したって構わないさ。
その分僕がフォローするから。

…確かに、お前は有能だ。
美人で、強気で、狡猾でありながら、さらりと優しい笑顔を作れる。
自分の実力を鼻に掛けないで前を向き続ける。

「お前は素晴らしい交渉センスを持っているよ」

「それはそれは…」

お褒めに預かりまして、と頭を下げとく。

「でもな、ジュノ。」

国を見くびるなよ」

視線を前に向けたまま、カノンはあたしに手を伸ばす。

「いゃん。なによ、節操無し。城に帰るまで待ってよ」

「…話をややこしくするなよ。」

だからお前は一流未満だって言うんだ」

「なによ。さっきまで褒めてくれたのに。」

…心変わり?」

「…黙りなさい」

まるで埃でも取るような気軽さで、ジュノがあたしのジャケットの肩口から摘まんだのは軍用小型盗聴機。

流石軍用。年季を感じる、と呟くカノンの隣で失笑が漏れる。

「…やっぱ幹部かしら」

「さあ? どうだろうな」

興味無さげに相槌を打って、カノンは口元を吊り上げ、盗聴機を寄せた。

「ごきげんよう、×××××国軍の皆様。」

私、女王エース様にお仕えする執事でございます。

このたびは、我が国家と貴国の同盟条約を快諾して頂き、誠に有難う御座います。

さて、この盗聴機で御座いますが、こちらの方で処分させていただきますのでご心配無く。

また、我が国一の馬鹿者の失礼な発言についてはお詫び申し上げますと同時に、どうかご内密にお願い申し上げます。

我が国にも、貴国にも、リメットは御座いませんので。

以上を持って、両国同盟条約の挨拶とさせて頂きます。

それでは失礼致します。

さようなら」

バキャン、と空洞まで潰れる音がした。

哀れな鉄片を袋に詰めていく作業を押し付けられた。

なめらかな舗装された道が終わり、ガタガタとした剥き出しの大地。

それでも不快な揺れが少ないのは、執事の高性能な愛車のおかげか、単純にテクニクか、それとも

…自惚れは止めよう。

後が虚しいだけだもの。

重力でシートに押し付けられつつ、僅かな耳鳴りを感じながら、あたしは目を閉じた。

気が付けば、時は遅く。

光と成れないならば、私は影でいようか。

ふ、と意識が繋がる。

微睡みから覚める瞬間は個人的に風船が割れるイメージ。
子供の頃、手を離れたあの風船は、どうなったのかしら。

ぼんやりと覚醒を拒む頭を振って振り切れば、愛しいあなたの顔が見える訳無い。

「…うわー…」

「失礼だね、チェシャ猫さん」

「誰が猫よ。あたしは健気に国家に尽くすいたいげなわんちゃんよ」

「わんちゃん、って。どっちかって言えば、執事クンじゃない？」

「あー。確かに」

くすくすと笑みを溢して、まるで恋人のように手を合わせる。

「犬は犬でも、忠犬ね」

「それも病的な、ね」

思わず吹き出したアリスに柔らかに微笑み、ジュノは優しく諭すように、吐き出す。

「…で？アリス君はどうして此处にいるのかなあ？」

「可能性は3つ。

いち、ジュノが鍵をかけ忘れた。

に、僕が忍び込んだ。

さん、襲いに来た。

さあ、どおれだ？」

「2のアンタが忍び込んだ」

「わお！即答だね」

「じゃあ、どうしてアリスはあたしに乗っかってるのかしら？」

「何ででしょう？」

にっこりと微笑み合う。

「セクハラに決まってるんだろこのマセガキ」

「いたいいたいいたい」

真顔で前髪を鷲掴みにする下着同然の美女と、引っ張られる前髪の痛みにいたいを連呼する青少年の絵は軽く地獄絵図だ。

「いたいってば、離してっ」

「さっさと降りる」

「だから離してっってばあ」

底冷えのする目で睨みつつ、手を離して肩口を強く押す。

うわ、と声を上げてベッドにぼふん、と仰向けに引っくり返り、けらけらと笑う。

背はそんなに低くはないが、細身で華奢に見える為キングサイズのベッドに転がられても、狭さは感じない。

シーツに散るさらさらした金髪はやや長めで憧れの癖のないストレート。

ジュノはそつとため息を吐く。

女として産まれたなら、きっと美女だっただろうに。

笑いも治まったのか、くすくすと笑いながらうつ伏せになる。

普段の言動とあいまって、あまり年も変わらない筈なのに、弟でも見ているような気にさせられる。

というか、アリスは幾つなのだろう。

「アリス」

「んー？」

足をぶらぶらと揺らしながら生返事を返した。

「アリスって幾つだっけ？」

「…年？」

僅かに空気が変わった。

「そ、年齢」

「聞いてどーするの？」

「…別に？」

「何それ」

ふふ、と吹き出したアリスは冗談めかして胸に手を当てた。

「僕はアリーリス、通称アリス。

不思議の国ではなく、エース様のお城に迷い込んだ旅人。

ここはなかなか居心地がいいから居着いちゃいそうな、妙齡の美少年」

自分で言ったよコイツ。と軽く冷たい目がアリスに刺さる。

が、アリスは気にも止めず柔らかに笑って呟く。

「薔薇は、赤い内に摘んでおかなくては、取り返しのつかないものさ。

ね？ チェシャ猫さん」

それは、ジュノの思考をしばらく停止させるには十分な比喻だった。

双子の唄

エース様の様子がおかしい。

そう感じるようになったのは、実はここ最近の話だ。

以前に比べたら、格段によく笑うようになった。

アリス曰く、「まだまだへたくそ」な微笑みだったが、にこりともせず、かと言って怒るわけでもなく、ただ淡々と執務とお茶会を繰り返していた数ヶ月前よりは遥かに人間らしい。

「まあ、良い傾向じゃない？」

報告書を出しに来たジュノの返答はこうだ。

「前みたいな鉄仮面よりさ、近寄りやすいしお堅いカンジは無いし」

「お堅い……」

若干ジト目になりつつ、ため息を吐く。

最近アリスと色々あったせいかな、今日は割りときっちりパンツスーツを着込んでいる。

「ま、アリスのお陰じゃない？」

つい、押し黙った。

それは否定出来ない。

僕だって頭を過ったのだから。

エース様の事を考えると、隣でアリスが貶されながらも笑っている。

エース様もほのかに微笑っている。

アリスを、迎えるべきなのかもしれない。

国家の為に。

国家の未来の為に。

——エース様の為に。

彼女が笑うなら、国が穏やかに治まるなら。

「ま、あたしはどうだって良いけど」

「……お前な……」

「アンタが決める事でも無いでしょうが」

「……………」

正論だ。

僕は黙ったまま、手を振った。

今日の城は、久しぶりに静けさの中にある。

歌が聞こえた。酷く陽気で喧しい。

楽しい楽しい恋の歌。

貴方に出会えて幸せよ

薔薇の植木が咲いた日に私は貴方に恋をした。

「…どうにかならんのか」

「どうって、なんでしょうか」

「ご用は執事様をお通しください」

「∴カノンは仕事中だ」

妙に癪に障る奴等だ。

アリスが城に現れた辺りにやって来た宮殿音楽家「ツインクロ」

。

世界を又にかけ、宮殿を尋ねては、「天使の歌声」と称される歌声を披露し、旅をする年齢不詳の双子だ。

何故かは知らんがいたくここが気に入ったらしく、長いこと居座っている。

全く、アリスにしろ双子にしろ、どうしてここは変人が居座るのだろうか。

再び歌い出した双子の片割れ。

赤いベレー帽を被ったチズの高音が響く。

青いベレー帽のロイのウゝアイオリンが歌声に寄り添う

今度は賛賞歌か。

こいつ等のレパトリーはさぞ膨大な量なのだろう。

その中には、鎮魂歌も入っているのだろうか。

ふと思って、考えを打ち消した。

今となっては居場所も分からない者に捧げる鎮魂歌と言うのも虚しいものだ。

「双子」

「「なんでしょーか？女王様」」

「バラードを、歌って欲しい」

双子は（普段からだが）愉快そうに笑って、顔を見合わせた。

「バラードだって」「バラードだって」

「「リクエストはいかが？」」

「いや、任せる」

近くにあった椅子に腰を下ろして、ついでに双子にも座るよう視線で促したが、二人は曖昧に笑うだけ。

「何にしよう？」「何にしよう？」

「恋の歌？」「栄光の歌？」

「悲しい歌？」「楽しい歌？」

「「さて、どうしようか」」

くすくすと笑い出した双子は、どうやら精神の成長を途中で投げ棄ててきたようだ。

大人びているとしたら社会人一步手前の成人、童顔だとしても高等教育中の学生にしか見えないのに、笑い声はまるで初等教育中の子供のそれだ。

背もアリスといい勝負だが、態度や振る舞いは下手をすればアリスより幼い。

それでいて、目の奥の光は時々達観にも似た年不相応な色をする。

全く、訳のわからない双子だ。

ただ、何処と無くアリスと似ている気もする。

だからだろうか。

最近アリスが双子を巻き込んでカノンのため息の種を増やしているのは。

「それでは、敬愛なる女王様の為に」

「『『青い月夜の契り』』」

ロイのウゝアイオリンが繊細な旋律を奏で始める。

二人が一斉に赤い唇を開けば、高音と低音が絡まり、響き、ゆったりと物語が始まる。

私はそっと目を伏せ、最近聞き慣れた歌声に耳を傾けた。

鎮魂歌は、また今度です。

父上、母上。

ラバータイム

「…ん？」

僕はいつも通り、書類整理をしていた。

ふと目に留まった新聞の一文。

『老夫婦の自宅に強盗。夫婦は外出中の為、被害者は無し』

国内でだけ出回る所謂ローカル誌だ。

国内で起きた、大手新聞社でも拾いきれない起きたたての事件や、切り捨てられる小さな事件は、地元の記者が記事にしてローカル誌として一早く伝えてくれる。

実に便利だけに、国内での需要は高い。

城には特別発行させている。

事件が起きたのは昨日の夜。

新聞社の情報の速さが感心する。

僕はさらに読み進めた。

『西部に住む××さん夫婦の自宅に強盗が入ったのは昨夜9時25分ごろ。』

幸い、夫婦は外出中で、夫婦に怪我は無かった。

近所に住む男性（25）によると、何かを探しているようだったそうだ。

犯人は男の4〜6人で、体型はまちまち。警察は引き続き調査を行う予定』

また調査委員会作らなきゃ。

優秀な人材をあんまり回し過ぎると組織自体が回らなくなる。

かといって少なすぎても事件がなかなか片付かない。

…5人一組で四班。

課長クラスから4人、班長に回ってもらおう。

ついでにベテランとやる気のある新人を2…3で混ぜて、教育も兼ねてもらうか。

ぶつぶつと呟きながら警察に電報を打つ。

基本的には僕が警察を動かすけど、やっぱり経験の生かされる場合もある。

細かい動きや指示は署長を初めとする幹部の仕事。

と、視界が真っ暗になる。

冷たい皮の感触が目元を覆っている。

「……アリス？」

「ハロー、執事クン」

「英語？」

「棒読みのねー」

くすくすと笑う。

最近アリスの悪戯の矛先が僕に向いてる気がする。

「というか、君はいつまで居座る気なの？」

「さあ？麗しのエース様がお決めになる事だから」

「……はあ」

アリスが肩を竦めた気配があった。

するりと手を外される。

急に目に入る光に軽く目を細める。

にやり、ともにこり、とも取れる曖昧な笑みを浮かべたアリスが手を後ろ手に組んだ。

「執事クンさあ、最近口の聞き方悪くない？」

「…そうか？」

「ほらあ。もう敬語使ってないし」

「ああ」

なるほど、と言うのは飲み込んだ。

「では、敬語がよろしいですか？」

「うわ、止めて。鳥肌」

自身を抱きしめ、腕を擦る。

失礼な。とジト目になった。

と、感じる違和感。

「アリス、君、手袋なんかしてたんだな」

「へ？……うん、まあ」

アリスに手袋のイメージは無い。

ぶっちゃけると、子供として見てきたからだ。

初めてアリスがこの城に来たとき、アリスは正装で、確か手袋を嵌めていた。

ずっと、手袋なんか嵌めていただろうか。

「てかき、執事クン」

「……いい加減止めないか？」

「何を？」

「『執事クン』と呼ぶのをだよ」

「えー？ いいじゃん」

「そんなふざけたあだ名で呼ぶのは君くらいだ」

「なおいしいじゃん。個性だよ個性」

「……好きにしないさい」

「はあい。…話それたけど本題ね。」

エース様知らない？」

「エース様？…執務室にいらっしやらないのか？」

「居なかったから執事の君に聞いてるんじゃない」

「…まあ、そうか。」

またお買い物じゃないか？

今日はジュノが午後には帰って来るはずだから」

「お買い物？…へえ…新しい趣味？」

「みたいだな。仕事を終わらせてから行かれるから注意も出来なくてな」

「注意って？」

「一国の主が自国とはいえ、独りでふらふらと歩き回るのは危険だ、とは言ってるんだ。だけどジュノが付いてる上にせっかく初めての趣味が出来たんだ。潰す訳にはいかないだろ？」

…まあ、目を瞑ってはいるけど、最近物騒だろ？」

「ふうん。最近何かあったっけ？」

「ん？…ん、読んでみる」

「……………」

いつの間にか仕事に埋もれかけていたローカル誌を掘り出して、アリスに差し出す。

ほんの少し躊躇ったような気配を見せて、アリスは目を通し始めた。

直ぐにいつもの飄々とした雰囲気を纏ったが、確かにアリスは動揺していた。エース様のお仕えする執事たる者、それくらいの事は見抜けなくてはいけない。

にしても、何処にアリスを動揺させる要素があったのだろうか。

日も傾き始めた頃。

エースは独りで町のまで買い物に来ていた。

ただし、町とはいえ城の近くで、本人としてはあまり（ジュノ曰く）「買い物した感」が無い為、不満タラタラだ。

一国の主。そうかもしれない。昔の自分なら出歩いたりしなかっただろう。

日々書類を片付け、国の安定した繁栄に命を捧げただろう。

でも、今は。今は？

人生を国に捧げていいと思うの？

誰かが問うてくる。

それは、マリアの声かもしれない。

かつて城の花だった、姫君。

愛くるしく笑う、可憐な優しき乙女。

マリア。

マリアは死んだ。

だから私がいる。

「女王」が。

エースは頭を振って、唇を噛み締めた。

「……あのお調子者……」

紙袋は白い指先でくしゃくしゃになった。

隣を通り過ぎる男がちらりとエースを見た。

少し不思議そうな視線を向けていたが、興味を失ったのか、すぐに視線を外した。

そのまま小型無線で何やら話ながら遠ざかって行く。

エースは深呼吸をする。

埃っぽい空気が肺を満たす。

風の強い季節だ。

下から吹き上げた風が、僅かに立ち並ぶ工場の煙を巻き込んで空高くまで昇っていく。

それを核にして冷え込んだ夜に雪が降るのだ。

そんな国が、好きだと思った。

だからこそ、女王になろうと思った。

「私は女王、だ」

人知れず呟いた言葉は、深く自身の胸に染み込

「エース様ッ」

「どうしたんだ、そんなに慌てて」

僕がエース様を見つけたのは、城中を駆け回って息を切らした頃だった。

「南地方でちょっと、ありましてッ」

「…南？」

「、はい」

「私はさっきまで南地方に居たぞ。…城の近くだが」

「お怪我は…ありませんね。良かったです。」

「で？何があった」

「はい、小さな爆発騒ぎです。」

平和慣れた国民性ですからね。…いい事なのですが。大騒ぎしちゃって。ちよつと居酒屋まで行ってきました。なのでエース様」

「何だ？」

「くれぐれも、アリスを逃がさないで下さい」

「…：は？」

「客間に閉じ込めてあります。コック相手にキャッチボールをしたところ、ガラスを5枚割りました。帰ってきたらお説教です」

「…：そうか」

「では、いって参ります」

「…：いってらっしゃい」

ぽかん、と間拔けな顔をしていたんだろう。

エース様は怒ったような、困ったような顔をしていた。

「さっさと片付けろ、馬鹿者」

「…、はい」

背を向ける刹那。

エース様が笑った気がした。

もう何年も見ていない、穏やかで優しい

まるで聖母の様な微笑みだった。

鐘・ベル・Bell (前書き)

流血・銃撃・崩壊、ご注意ください。

苦情は一切受け付けませんので、自己責任でご覧ください。

鐘・ベル・Bell

凄まじい音が響き、僕は肩を竦める。
もういい加減うんざりしてきた。

「執事さん、どうぞ」

「…どうも」

爆発騒ぎのあった南の居酒屋の女将であろう女性の差し出したブランデーを一気に煽り、ため息を吐いた。

爆発騒ぎ、と言う通報を受け来たがいざ話を聞いてみれば実に脱力する話だった。

始まりはさっきブランデーを出してくれた女将さん。

要約すると届いた荷物を火の近くに置いて店の準備をしていた結果、中身の爆竹に火が付いたらしい。

差出人は店主でもある旦那さん。

爆竹は誕生日のサプライズパーティーの材料で買い集めた物。

爆発した爆竹はキッチンで暴れ、慌てた客が通報した。と、言うことらしい

何故僕が呼ばれたのか。

それは正直僕自身にも分からない。

二杯目のブランデーを飲み干すとため息が溢れた。

今日の前では二人の男が取っ組み合いの喧嘩をしている。

止めた方がいいのかもしれないが、脱力感と若干の苛立ちが僕の腰を重くしている。

自棄になっていたのかもしれない。

三杯目のブランデーを仰り、深いため息と共に僕は手を叩く。

「はいはいはい、いい加減大人しく話し合ってくださいよー。
いい大人がたかが痴話喧嘩で殴り合いなんて恥ずかしいでしょう？」

テラスに風が吹き抜けた。

芳醇な薔薇の香りがエースを包んだ。

「エース様」

「…アリスか」

「ふふ。ここ、風が気持ちいいね」

「だろう？」

私の好きな場所だ」

猫の様に伸びをしたアリスが手摺に寄りかり、目を細めた。

テラスから国が一望出来る。

城の周りを囲う城壁とその中の薔薇園、活気のある城下町、酒場、
そして隣国。

「いい景色だね」

「山の上だからな。」

「…美しいだろう？」

「本当…美しい国だね」

ふわり、と笑みを浮かべたアリスの髪を風が掻き上げる。

「…アリス」

「んー？」

手摺に体を預けて組んだ腕の上に頭を乗せたアリスが気だるげな返事を返した。

暖かい日の光を照り返す髪がキラキラと輝いた。

「…この国が好きか？」

「好きだよ。」

前に話したと思うけど、僕は美しい女王とお茶をするのがが好きなんだ」

「…でも、カノンも賛同したなら。」

例えばだぞ？

もしもカノンが賛同して、なおかつお前が望むなら、もう少しここにいてもいい」

「…ここに？」

「ああ。移住したっていい。職は私が見繕う」

「本当？」

「ああ」

きよとんとした後、アリスは柔らかい笑みを浮かべた。

「ありがとう」

いつもに比べ饒舌なエースは、アリスから目を反らした。

例えばの話だぞ、と付け足して息をはく。
刹那、アリスが大きく背を反らした。

一瞬遅れて石畳に硬い物が当たった。

「アリス？」

「…エース様、走れる？」

「…はあ？」

「とりあえず、ヒールは脱いで」

「アリス？」

「敵襲だ」

エースは目を見開いた。

カノンに指示を出そうとして、その声は喉の奥で不発に終わった。

カノンは南の酒場に行ったきり、まだ戻っていない。

唇を噛んで苦い顔をしたエースは赤いヒールを脱いで、凜とした顔でアリスを睨む勢いで顔をあげた。

「中央指令室だ。」

カノンに代わり全軍に指示を出す」

「りょーかい」

アリスはエースの手をとって走り出した。

二人の間を鉛玉がすり抜けていく。
その何発かがエースのドレスを貫通してズタズタに切り裂いてい

た。

アリスを掠めた弾丸はそのまま窓ガラスを突き破り、破片が散った。

中央間の扉を開いた瞬間、召し使い達が驚いた様子でボロボロの二人を見た。

そして弾丸が飛び込んできた途端、大混乱に陥った。

蜘蛛の子を散らした様に逃げていく召し使いの中には流れ弾に当たり倒れる者もいた。

紅薔薇の美しい城が赤い血で染まっていく。

エースはその中を絶望的な思いで走り抜けた。

通信端末に着信があった。

「はい」

『カノン様っ』

「どうした？落ち着いて話さない」

『はい、メイドのマリー、ですっ。』

て、敵襲なんですっ』

「……敵襲ッ!？」

僕が倒した椅子がガタンツと音をたてた。

会計を済ませて車に飛び乗る。

この際飲酒運転だとかそう言うことは気にしていられない。

「…エース様…ッ」

嫌な汗が背中を伝った。

銃声が聞こえた。

徹夜明けでもそれだけで覚醒するあたしの体に密かに感謝した。

「物騒ねー全く」

執事サマは何やってるのかしら。

髪を掻き上げて愛銃に口付けを落とす。

弾が全て詰まっている事を確認してドアに背を付ける。

「1、2、3」

スリーカウントで外へ飛び出す。

腰溜めの体制で構え、油断無く辺りを見渡す。

血の匂いが鼻を突いた。

「かくれんぼは終わりにしよーぜアース」

「そうだ、俺達友達だったよなア？」

酒で潰れた声、ダミ声。

聞こえた声は二人。

でも足音は、8人。

手口から見て素人じゃない。

多分おてんとうさんより闇を好むヤツ等。

盗賊よりも下劣で汚いヤツ等。

それにしても、

「アースって、誰よ…」

つい、呟いていた。

「誰だッ!？」

別の声。

気付かれたらしい。

舌打ちをして廊下へ飛び出す。

殺してはいけない。

あくまで自己防衛の為にだけ発泡は許可されているから。

それが世界基準。

相手は8人。

拳銃は10丁。

急所は外して腿との辺りを狙う。

一人。

「ぐああああっ!!」

二人。

「うああああっ!!」

三人。

「ぎゃああっ!!」

四に、

「ジュノ様ッ!!」

「ッ!?!」

背後から爆発音。

弾丸が風を切る音。

誰かの足音。

ぬくもり。

悲鳴。

生暖かい液体。

あたしの隣に落ちたのは、糸の切れた操り人形のように崩れ落ちた、

「……マリー……?」

何処と無く姉さんに似た、優しくて可愛いあたしのメイド。

「マリイイイイツ!!」

背中から血がドクドクと。

細い息が頼りない。

青ざめていく顔。

血の香り。

いや。

いや。いや。いや。いや。いや。

「いやああああッ!!!!」

そこから先は、もう記憶が無くて、気が付いたら、あたしはただ呆然とマリーの冷たい体を抱いて優雅な鐘の音の中、血の海にへたり込んでいた。

足がズキズキと痛む。

ガラスを踏んだらしく、所々赤い足跡が出来ていた。

アリスも私も荒い息で、ただしアリスはフラフラと立ち上がり、私はだらしなく座り込んだ。

中央指令室から出てくるメイドを確認したアリスが私の手を引いて駆け込んだのは私の寝室だった。

吐息ひとつで息を整えてしまうアリスは伊達に旅人では無いことを実感させた。

漆黒のロングコートを羽織り、帽子を被ったアリスが早口に囁いた。

「エース様、巻き込んでやってごめんなさい」

「何、なんだっ、…奴等は」

「僕を追ってきたんだ。狙いは僕だ」

「アリス…」

「これ以上エース様を巻き込む訳にはいかないね。

いい？ 執事クンが迎えにくるまで絶対に部屋から出ちゃ駄目だよ？」

「何を…ッ」

ふわりと目をすがめたアリスが私の手を取り、口付けを落とした。

「エース様、僕はこの国が、この城が、貴女が大好きです」

「アリス…」

「きつと、帰ってくるよ。」

全てを終わらせたら」

「全て…？」

「そう、全て。」

貴女に迷惑はかけないよ。

…散々お世話になって来たんだ、せめて貴女だけでも守っていくよ」

「……………」

「エース様」

どうかお元気で。

ふっ、と一瞬アリスの匂いに包まれ、直ぐに冷たい風が通っていた。

ドアを開けたアリスが外に銃弾を撃ち込んで、様々な音がした。

にっこりと笑ったアリスは窓を押し開け、窓枠へ足をかけ、宙へ身を踊らせた。

コートが風を孕んで吹き上がり、まるで羽のように翻った。

そのまま墜ちていくアリスはまるでスローモーションのようだった。

私はただ、座り込んだまま長い間動けずにいた。

午後を告げる鐘を遠くに聞きながら。

中央間まで来ると濃厚な血の匂いがした。

思わず顔をしかめてしまう。

絶え間なく続く銃声。

珍しくジュノも苦戦しているらしい。

無駄に派手な通信端末へ連絡を入れたが返事は無かった。

おそらく交戦中だと判断し、それ以上連絡は入れなかったのは正しかったようだ。

孤児のジュノは身軽な体を買われ国家特殊公務員への道を歩く事になった。

同じ特殊公務員として、幼い頃から共に訓練を積んできた。

特に戦闘工作員も兼ねるジュノは軍の訓練に混じり、生傷が絶えなかった。

だがそれ故にジュノの戦闘能力は、元々持ち合わせていた戦闘センスと相まって、僕の力も超える。

信頼のおける相棒だ。

艶消しの銃身を指先でなぞり、ジュノに加勢すべく僕は血染めの廊下を駆けた。

そして僕は息を吞む。

まず絶え間なく続く銃声の原因がジュノであった事。

その足元に転がったメイドがついさっきまで会話をしていたマリ―である事。

そしてジュノの目が今まで見たことのない色をしていた事。

見たことのない、暗い色。

「ジュノッ！！」

胸一杯に吸い込んだ空気を使い切る勢いで叫んだ。

僕の声は届かない。

倒れた三人の、おそらくマリー―の言う敵襲の犯人である男達に息はない。

それでもジュノは発砲を続けていた。

無表情に、機械的に、無感情に引金を引き続ける。

弾が無くなれば、再び充填して、撃つ。

「ジュノ、止めろ。ジュノ…ッ」

憎しみで冷えきった瞳。

「ジュノ」

赤毛をさらに赤く染める血。

「ジュノ、」

血濡れのマリィ。

「止めろ」

後ろから右腕を掴んだ。

しかしその腕の一振りで手を振り払われ、

「っ…、」

腹部に強烈な肘打ちを喰らう。

男顔負けの怪力をもろに受けて息を詰まらせていると、額に硬い物が突き付けられた。

「邪魔しないでよ。あたし達今オタノシミ中なの」
「銃を下ろせ、ジュノ」

「二回目はいくらアンタでも許さないわ。」

大人しく見ていて」

「銃を下ろすんだ、ジュノ」

「相変わらず聞き分けのない堅物ね。

その石頭に穴開けて柔らかくしてやろーか？ん？」

「銃を下ろせと言っている！

聞こえないか！？ジュノ・ウィリツシュ」

限りなく狂気に近い色をしていたジュノの目が大きく揺れる。

ジュノ・ウィリツシュ。

ジュノの本当の名であり、最高機密。

ジュノをそう呼ぶのはかの鬼教官くらいだ。

トラウマを利用するのはいささか罪悪感に苛まれるが、緊急事態である今、そんな事を気にしている暇はない。

銃身を鷲掴みにして銃口を下へ向けさせる。

そのまま銃を強く引いて体を傾けさせつつ足を払う。

目を丸くしたジュノの首筋に手刀を叩きつけた。

一瞬意識を飛ばしかけたが直ぐに足を踏ん張り頭を振って覚醒を試みる。

「甘かったか…」

教わった通りの対処法が素直に実行される。

僕には無い、綺麗で潔癖な戦い方。

故に次も読みやすい。

鋭い視線が僕を射抜き、拳が顎を狙い飛んでくる。

それをバックステップでかわし大きく踏み込んで無防備な腹部へ。

みぞおちに重めの一発。

…跡が残らないといいが。

大きく見開いた目が揺れていた。

急速に脱力し始めた体をそっと支える。

溢れ落ちた一粒の涙がジュノの心を物語る。

ズタズタにされた男達、血濡れのマリー、背後に倒れる比較的綺麗なトレンチコートの男。

だいたい状況は読めた。

マリーを殺したのはトレンチコートの男であって、哀れな死体は逆上したジュノに八つ当たりを受けたただけだ。

「…ジュノ…」

血の海に沈んだ幼なじみを責める事は出来ない。

エース様を探しに僕は歩き出した。

寝室に、エースはいた。

ボロボロになったドレスと血の滲む足裏を見たカノンは苦々しく顔を歪めた。

「エース様」

「……………」

ゆっくりと振り返るエースにカノンは深々と頭を下げた。

「申し訳ありませんでした」

「……………」

エースの目はどこまでも透明だった。

空間に静寂が満ちる。

「あなたは」

「…エース様…？」

唐突にエースは切り出した。

まるで無垢な子供の如く邪気の欠片もない声音にカノンが怪訝そうに眉根を寄せた。

「だあれ？」

カノンは目を見開いた。

同時に嫌な予感が過った。

昔、カノンがまだ城に引き取られて間もない頃。
一度だけ、会ったことがあった。

肩の長さで切り揃えられた艶やかな黒髪によく映える赤いリボン
をまるで不思議の国のアリスの様に結わえ付けた少女。

聖母の名を持つ優しい少女。

「……マリア、様？」

「どうして私の名を知っているの？」

きょとん、と小首を傾げた女王はカノンを絶望の底に突き落と
した。

どこか遠くで鐘の音が、まるで幕引きの様に響いていた。

第二章 偽りだらけの白兔

カツン、カツン。

ヒールが大理石を叩く音が響く。

ゆっくりとしたテンポで刻まれるそれは、静まり返った城内と相まって、酷く寂しい。

カツン、カツン。

カツン、カツン、カッ。

そしてそれは唐突に止まった。

二階の客間へと続く階段と同化する、カノンの隠し本棚の空いた部分に蹲る双子の宮廷音楽家の目の前で。

目の前に落ちた影に気付き、ロイが片割れの裾を引いた。

「チズ、チェシヤ猫が来たよ」

うとうととしていたチズは、丸く大きな、しかしやや垂れ気味の目を擦り、客人を見上げ笑う。

「やあ、チェシヤ猫。ご機嫌如何？」

「どう見たって不機嫌でしょう。失礼だよ、チズ」
「そお？」

ロイが丸く大きな、だがややつり気味の目を見開き、ジュノを見上げた。

包帯を巻いた痛々しい腕を吊り、頬にガーゼを張り付けたジュノが、空いている左手で壁を叩いたからだ。

「：ジュノ嬢、利き手が塞がってイライラするのもわかるけど、八つ当たりはいけないよ。
左手も、痛いでしょう？」

「大丈夫だよ、チズ。ジュノ嬢は両利きらしいから」

「ロイは黙ってて。
ね？ジュノ嬢——？」

ぽつり、と雫がチズの頬に落ちた。

ぽつり、ともうひとつ落ちて流れていった。

「……ねえ」

「「……………」」

虚ろな目で沈黙を守ってきたジュノの言葉に、双子は口を閉ざした。

「何があったの？」

その声は、酷く弱々しく、彼女には似合わない声色で。

「「何って」」

その表情は、酷く悲痛で、彼女とは思えない情けないもので。

「一昨日、何があったって聞いてんのよ」

でも変わらない傲慢さが、彼を少しだけ安堵させた。

「エースは話になんないし、カノンはいつも以上に堅物だし、ハ
ーノールベルも誤魔化す」

ひとつ、小さな呼吸を挟んでジュノは吐き出すように言葉を続けた。

「アリスはいないし、城はこんなんだし、あたしは途中から記憶
が無いし、マリーも殺されて…ッ！」

ガンッ、ガンッ。

力一杯殴り付けた拳が鈍い音をたてた。

「あたしだけなのッ！あたしだけ、何も覚えてないのっ！！
っねえ、何があったの？どうしてマリーは死んだの？どうしてア
リスは消えたの？何が、どうして……ッ！！」

答えて…。

最後は細い嗚咽に消えた。

壁伝いに崩れ落ちたジュノを追うように双子の視線は下に下がる。

いつもより華奢に見える肩が震える。

双子は顔を見合わせ、数回瞬きを繰り返して大きく息を吸った。

「午後を告げる鐘の中、アリスは消えた」

「午後を告げる鐘の前、乙女は兎に告げた」

「「悪魔の存在を」」

不思議な高揚のある旋律。

「乙女は死んだ」

「悪魔の手で」

「悪魔は死んだ」

「復讐の手で」

双子の目は不思議な色に光り、濡れた目でジュノは双子を見た。

「彼女が愛しいのはわかるけど」

「仇討ちは感心しないよ、ジュノ嬢」

すく、と立ち上がりジュノの横で慈愛のこもった瞳で、優しい声で囁いた。

「笑って、チェシヤ猫」

「笑って、小さな略奪者」

「僕らも、彼女も」

「「君の傲慢で強気で、気高い笑顔が好きなんだよ」」

そして布擦れの音を残してどこかへ歩み去った。

「……………っ」

小さな嗚咽を噛み殺し、また涙を溢す。
傲慢も余裕もかなぐり捨て、幼子のように。

そして、己の無力さに歯噛みをして、それでも、手を伸ばし、伸ばした手は空を掴み、ゆっくりと踵を返した彼もまた、どこかへ歩み去った。

マリアはそっと目を開いた。

包帯を巻いた足が少し痛むが、歩けないこともないので散歩にでも行きたいのたが、いかんせん、清潔なベッドに待機を命じられているのだ。

城の中は慌ただしくて、さつき漸く中年のメイドが紅茶を淹れてくれた。

見ない顔だったな、と一人思案する。

あの後、失血による貧血で気を失ったマリアが目を醒ました時、側で安堵したようにため息を漏らしたのは知らない人だった。

金色の髪はアリスを彷彿とさせたが、赤い瞳はアリスとは似てもつかない正反対の色をしていた。

「エース様」。

彼はマリアをそう呼んだ。

訳がわからなくて顔を見上げると、一瞬悲しげに綺麗な顔が歪んだ。

目を伏せて、軽く唇を噛んだ彼はもう一度マリアと目を合わせた。

射抜くような眼差しに少し怯んだが、マリアも赤い瞳を見つめ返した。

綺麗に澄んだ赤だ。

自分のとは違って吸い込まれそうなそれは、刹那、酷く優しい光を灯した。

包み込むような微笑みで、彼は口を開いた。

「はじめまして、マリア様。私、本日付で貴女様の執事として仕えることになりました。アリスの弟、イルと申します」

遠くで腕を組み、壁に背を預けて不機嫌そうにこちらを眺めていた赤毛の美女――ジュノが、息を呑んだのがわかった。

でもそれ以上に、ひとつの言葉がマリアを惹き付けた。

「アリスの弟」と彼は名乗った。

アリスに繋がる人。

アリスの血縁。

アリスの弟ならば、同じ金色の髪も納得できる。

アリスと異なる瞳の色は、両親のどちらかの遺伝なのだろう。

ああ、アリス。アリス。アリス。

「アリスは？アリスはどこに！？」

早口に捲し立てると、彼は穏やかな声で答えた。

「兄はある事情で身を追われています」

「マリア様に迷惑をかけられないから、と言伝てを預かっています」
「兄が無事、またこの国に戻って来れるその日まで」
「僕が兄の代わりにマリア様のお世話をさせていただきます」

優しい微笑みにアリスが重なった。

溢れ出す涙を、イルは拭ってくれた。

「ですから、マリア様」

「兄が帰ってきたときは笑顔で迎えましょう」

「元気を出して、より魅力的で教養深い淑女になりましょう」

イルの声は優しい。

イルの微笑みは優しい。

イルの言葉は優しい。

だからマリアは笑って答えた。

「ええ。どうぞよろしく、イル」

静かに笑って、マリアは白磁のティーカップをテーブルに置いた。

それでも国は回る。

僕が「イル」を名乗った瞬間、ジュノの表情が凍り付いた気配がした。

ジュノはだんだん、暗く重い空気を発生させ始め、終いには部屋を出ていってしまった。

しかし：エース様もジュノも、命に別状の無い怪我で済んで本当によかった。

しばらくは城の復旧作業に終われるだろうが、エース様にうるさわれるのも困るので本でも届けようかと思う。

童話、哲学、話題の純愛小説。
どれも好みだろうか。

案外冷静な考えに苦笑する。

結論から言うと、どうやら僕はエース様の中から完全に忘れられた存在らしい。

正確には、「さっき初めて会ったアリスの弟」と認識された、だろうか。

僕はこれを皮肉と呼んでいいのだろうか。

ふらりと消えたジュノを追ってはみたが、僕が触れる資格なんて無い気がした。

さて、とひとりごちて目を閉じる。

考えを巡らせる。

メイド、コック、及び召し使いは大半が軽い怪我で済んだらしく、明日から復旧作業に精を出してもらう予定だ。

：メイドと言えば、ジュノのお気に入り、のメイドが殺されたな。
葬式は復旧が粗方片付いたら執り行おうか。

はっ、として頭を振ってその考えを追いつく。

今考えるべき事は国の安定だ。

中枢が揺らげば国が揺らぐ。

国が揺らげば他国と敵対する可能性が出てくる。

攻め込まれば、交戦は免れない。

戦争が起きれば、国は崩壊し、築き上げてきた文化も技術も失いかねない。

痩せた土地、年中吹く強い風。

その中で発展を遂げてこられたのは、ひとえに交戦を避け、他国に負けない技術者を保護し、国民と共に歩んできた王族一家の才能の賜物だ。
ロイヤルファミリー

その血を継ぐエース様だが、今のエース様に任せる訳にはいいかない。

今のエース様は、当時年端もいかない少女だった頃の優しいマリア様だ。

最年少で即位する前の、世間知らずで優しく、無邪気で純粋で、人一倍お節介な姫様だ。

そうでないなら、忌み子を拾うなんて馬鹿な真似はしないだろう。

ふ、と短く息を吐き出して、世界を遮断するように、僕は机に伏せた。

それでも時は回る。

朝からトンカチやらノコギリやら笑い声やら怒鳴り声やらが絶え間なく聞こえてくる。

割れた窓ガラスがキラキラと日光を反射するのだろうけど、それすらも私の憂鬱を助長するだけ。

メイドやコック同様、人員不足で修復に駆り出されたあたしは額に浮かんだ汗を拭う。

着古した縞のシャツに綿のズボンはあたしの普段着で、更にメイドに借りたエプロンを着けている。

ふんわりとしたラインは可愛いけど、あたしには似合わない。現にカノン（今はイルだったっけ）の顔は軽くひきつっていた。

そこまで嫌がらなくてもいいじゃない、馬鹿。

「全くです。ジュノ様、とってもお似合いですのに！ねえ？」

「ええ！ジュノ様、ワンピースもお召しになっては如何ですか？」

「いやー：あたしはエプロンで十分ですって」

「勿体無いですわ！せっかく似合うのに！！」

「そんな細い腰で：そんな細い肩で：。嗚呼、神は不公平ですわ」

「そんなこと無いですって。貴女だって、十分綺麗です」

「メイドは力仕事ですから。ジュノ様の様なボディーラインは夢のまた夢ですわ」

大柄で人のいいメイドと細身でお洒落好きらしいメイドの会話は

ポポンと軽快なリズムで進んでいく。

なんとなくナズミ姉さんとリン姉さんを重ねてしまう。

「ジュノ様、どうかなされましたか？」

「え…？」

ふと我に帰り、二人の顔を見ると、驚きのような、困惑のような微妙な顔をしている。

「どうって…」

「いえ、一瞬悲しげな顔をされたので」

「ああ、うん。大丈夫です。人使いの荒い執事サマにどうやって復讐しようか考えてただけですから」

にやり、と悪戯っぽく笑うと、二人も共犯者の笑みを見せた。

「カノン様のお茶に何か混ぜましようか？」

「陰湿ねー。後ろから奇襲を仕掛けます？」

「殺す気ですか？」

思わず笑みが溢れる。

まるで子供の頃の会話だ。

ふっ、と息を吐き出して、腕捲りをした。

「さて。さっさと終わらせて執事サマをぎゃふんと言わせてやりますか」

はい、と声を揃えた二人はやっぱり共犯者の様だった。

音もたてずにカップを置いた妙齡の女性が穏やかに笑んだ。

視線の先には少し赤い顔で居心地悪そうに視線を落とすカノンがいる。

少し目が赤い。

もともと瞳の色が赤いので分かりにくいが。

「大変、失礼致しました…」

「お気になさらないでください。

貴方も人間ですもの。辛いこともありますわ」 「そーそ。辛かったらおっちゃんの胸でお泣き」

「これ、口を慎みなさい」

「酷えなあ」

「…あの…」

おずおず、といった感じで口を挟んだカノンに二人分の視線が集まる。

こほん、と咳払いをしてカノンは口を開く。

「それでは、マダム・ソフィア並びにアンドリー。

本日より、よろしく願います」

凜と声を張ったカノンを二人は、血の繋がりも無いのにまるで我が子の成長を見届ける親の様な顔で声を揃えた。

「「こちらこそ、カノン様」」

Executor of blood getting wet

凪いだ風が髪を揺らす。

緩やかに波を打つ黒髪は日の光を照り返し不規則に歪む輪をいくつも生み出した。

頬杖を付き、空を見上げる仕草はまるで少女のようだが、見る限りだいぶ前に終えたはずの大人の女性だ。

表情は柔らかい。今にも鼻歌が聞こえてきそうな程に。

太陽が眩しいのか、軽く細めた目は王家^{ロイヤル}一族の証、ルビーのように透き通った真っ赤な瞳。

どんなに他の血が混じっても色褪せる事の無い揺るぎ無い王の血だ。

彼女の名はマリア。

聖母の名を持つ、とある王国の王女に君臨する人。

そして、旅人を待ち続ける人。

「マリア様」

誰かが私の名前を呼んだ。

アリスの目みたいな色の空（アリスの目の方がもっと綺麗だけど）を見ていた私は、そのまま振り返ろうとして失敗。仕方なく頬杖を外して手摺に手を重ねて漸く振り返った。

女の人がいた。

紅茶色の肩や絞った腰から下がふわふわ膨らんだドレスを着た人だ。

ニコニコと笑う少しふくらとした顔や、一つに束ねた柔らかそうな亜麻色の髪がとても優しそうな雰囲気醸し出す。

白いエプロンをしているから、新しいメイドかな、とも思ったけど、ウチのメイドはみんな紺のワンピースに白いエプロンだ。メイド達とは違う、綿（だと思う）のシンプルなエプロンをしている。

「…だれ？」

「初めまして。私、ソフィアと申します。

イル様の命により、マリア様のお話相手をさせて頂きますわ」

「ソフィア…」

はい、と笑うソフィア。

ソフィア。響きまで優しい名前だ。

「覚えていらっしゃるいませんか？」

昔はよくマリア様とお話しさせて頂いたものです」

「え…？」

必死で記憶を辿る。

昔、お父様とお母様に会いに来た人にこんな人がいた気もするけど、どうだったかしら。

「冗談ですわ」

「え」

コロコロと笑うソフィアは子犬みたいで可愛いけれど、私はムツとした。

「あらあら。可愛いお顔が台無しですわ、マリア様。
私めがお菓子をこしらえましたので、それで機嫌を直して下さいな」

ベリータルトを作りましたよ、と告げてソフィアは踵を返した。

ベリータルトに吊られて、私も駆ける。

今日のお茶会は薔薇畑でしょう、と考えるだけで頬が緩んだ。

ジュノは少し目を見開いて、それからいつものようにケラケラと笑った。

何、そんな顔してんの、と僕の肩を叩き、唇に笑みを乗せたまま目を伏せた。

大丈夫、うまくやるわよ、と呟いたジュノの声に小さく頷く事しか出来なかった僕はどうしようもない腰抜けだ。

いつも通り、勝ち気な笑顔で手を振っていったジュノが部屋を出ていってだいぶん時間が過ぎていったが、今もジュノの声が耳を離れない。

余談だが、短い間とは言え、盗賊として生きた日々はジュノを構成するほとんどのモノの基礎になっているらしい。

正に遠い東の国の言い伝え、「生まれて三年間で学んだことは死ぬまで忘れない」だ。

転じて言うならば、3歳までに叩き込まれた事は一生消えない。その人間の一部となって、その人間の言わば「性質」を決める。

気高く生きろ、美しく生きろ、と教え込まれて育ったジュノにとって、僕はあまりにも残酷な指令を僕は出した。

裏切り者を殺せ。

信じたくないのは僕もジュノも同じだ。

この国は弱くて小さい。

そして酷く生きにくい。

そんな国が平穩に過ごすには頂点に立つ事しか手段は無く、史上最年少で即位したエース様の精一杯の脅しは歪で、脆くて、危ういものだった。

それでも今日まで平和を保てたのは正に奇跡だ。

硝子の向こうの空を見る。

ああ、まるであの日と同じ空の色じゃないか。

痛いくらいの静寂。

知らず知らずの内に強く手を握り締めていた。

不意にノックの音が響いた。

返事をするにエース様、否、マリア様がおずおずと言った感じでドアの隙間から顔を覗かせていた。

「あのね、イル。ソフィアがベリータルトを焼いたらいいからお茶にしたいの。」

…今じゃ、駄目？」

「お茶ですか？」

時計はもうじき午後第4の鐘が鳴る時間を示している。

「直ぐに準備いたします」

「いえ、いいのよ」

「…はい？」

「いいのよ。そんな、――泣きそうな顔をしたイルに準備させるなんて」

「え…？」

「気分が優れないなら無理をする必要は無いわ。」

大丈夫よ。ナイフは触らないし、バケットにつめて薔薇畑まで行くわ」

あら、ピクニックみたいね、とマリア様は無邪気に笑った。

エース様と同じ姿で、大人のマリア様が笑う。

なんだか目眩がしそうだ。

「なら僕も一緒にさせてください」

「駄目よ。イルはシートを敷いて、お茶のお代わりを注いで、部屋

に生ける薔薇を摘むんでしょう？」

「……」

「あなたを苛めると、私がアリスに怒られちゃうの」

後でタルト持ってくるわね、と手を振ったマリア様を引き留める前に彼女は姿を消した。

多分、鼻歌を歌いながら軽い足取りでキッチンに向かったんだろう。

マダムにお礼を言わなきゃな、と考えて椅子に座る。

柔らかい背凭れに体を預けて、深いため息を吐いた。

荒い息の合間に悲鳴を漏らしながら、それでも男は走り続ける。

肉付きの良い巨体に似合わない俊敏な動きで風を切る彼の表情には、はつきりと恐怖が刻まれていた。

「何なんだ、何なんだよお……」

そんな問いに答える者は無い。

確かに感じる気配と、軽やかな足音が彼の恐怖を助長させた。

彼には心当たりがあった。

彼がコックとして潜り込んだ王国は女王エースの存在でもって穏やかな治安を保っていた。

外交もしかり。

エースがいるからこそ、弱小王国は平和を保っていられたのだ。

しかし、「エース」はいなくなった。

「エース」がいなければ規約を守る義務は無い。

これを王に伝えれば、きっと自分は昇格だ。

諜報をしなくても済まなくなるかもしれない。

夢にまで見た平穏な暮らしにが着実に近付いている。

その事実には彼の足は自然と加速した。

腰に巻き付けた使い込んだ革のホルスターから愛銃を取り出し、ろくに見もせずには後ろへ連射。

最悪足止め出来ればそれでいいが、弾が当ててしまうのは後々罪悪感に苛まれそうなので足元を狙った。

舗装された道に瞬速で当たり火花を散らす鉛の弾。

煉瓦を僅かに削ったそれに、追跡者は足を止めた気配がした。

人の良さそうな顔に恐怖と歓喜の入り交じった歪んだ笑みを浮かべ、全速力で駆け抜けようと煉瓦道を蹴った。

刹那。

「っ！！？」

頬に冷たい金属の温度を感じ、男は足を止めた。

否、止めさせられた。

首に巻き付いた細い腕に。
薄皮一枚を切った凶器に。
殺気も無い透明な空気に。

身長差があるのか、後ろに反らされた背中に感じる温もりは無い。

顎の下に回された腕に締め上げられ、ぐう、と喉が鳴った。

「……誰だ……っ」

「信じたくないけど、夢じゃあないようね」

失望したような口振りで淡々と言葉を紡ぐ声は女だと分かった。

それも、ずいぶん聞き慣れた物。

「……ジュノ、様……？」

「残念だわ、イーズ。」

「アンタの腕は買ってたのに」

奔放で、底抜けに明るくて、だがどこか影のある美女。

「さ、10秒だけ待ってあげるから、アンタの知ってる機密全部
洗いざらい吐きなさい」

生きて帰れるなんて思わないでよ、と囁く声は何処までも無機質
で、それが逆に男——チーフシェフだったイーズの恐怖を煽る。

「10、9、8」

ジュノが静かな声でカウントを始めた。

冷や汗が背中を伝う。

それでも、口を割る訳にはいかない。

「…5、4、3」

着実に迫るタイムリミットと、傷口から滲み、ついに伝い落ちた血の感触がただの脅しでは無いことを明白にしていく。

「2、い、っ！」

「っあああああッ！！！！」

イーズは吠えた。

すくむ体を奮い立たせ、自分を拘束する細い腕を力任せに剥ぎ取る。

「っあ、ッ！！？」

そして勢いを殺さずに肘打ちを繰り返した。

がむしゃらに突き出した肘は顔に当たったらしく、硬質で嫌な感触が残った。

緩んだ拘束をすり抜けて、今度こそ全速力で走った。

恐ろしくて堪らなかった。

自分のはるか後ろにあるはずの彼女の幻影がまだ絡み付いている気がしていた。

まだだ。

まだ死ぬ訳にはいかない。

まだ、まだ――。

初恋はガキの頃だった。

まだまだ生意気な小僧だった頃、他国から越してきた女の子。

控えめで大人びた雰囲気当てられたのはどうやら俺だけじゃなかったらしく、クラスの野郎共は全員揃って彼女の虜だった。

彼女とは何もないまま時が過ぎ、国家公務員にまで出世した俺は結局、彼女とは全く正反対の女と結婚した。

気が強くて、がさつで、可愛げが無くて、底抜けに明るい女だ。

料理は人並みにしたが、俺の方が巧かったから、食事はほとんど俺が作っていた。

何を作らせても俺の方が旨かったが、何故かベリータルトだけは嫁さんの方が美味かった。

国家公務員にしては静かな暮らしだったが、俺はそれなりに気に入っていた。

ある日の事だ。

俺は国王に呼び出された。

この国の王様はなかなか血の氣が多いお人で、うら若い女王様が治める国の事を目の敵にしていた。

そして、俺は諜報任務を命じられた。

期限は無期限。

ただし、憎き王国が失脚するような情報を手に入れるまで。

国家の犬に拒否権なんかあるはずもない。

七日後、俺は国を出た。

国外へ繋がる列車を待つ間、見送りに来た嫁さんと二人揃って押し黙っていた。

冷たい風が吹くホームにぽつん、と置かれたベンチでぽつりぽつりと言葉を交わした。

俺の上着を被せた嫁さんの腹の中には漸く授かった命。

一人で育てるのは大変だろうけど、俺等の大事な子供だ。しっかりと育ててくれ。

うん、と小さな声で答えた。

国から補助が出るから。

うん。

足りないようならすぐ手紙寄越せよ。

俺が言ってる。

うん。

すぐ帰ってくるから。

うん。

体冷やすなよ。

うん。

そして俺等はまた黙る。

列車はまだ来ない筈なのに、直ぐにでも離れてしまいそうで、強く手を握った。

そして列車がやって来た。

気を付けてね。

しっかり仕事しておいでよ。

気丈になっ、と笑って見せた嫁を抱き寄せ、きつくきつく抱き締めた。

苦しいよ、と悪態をつく辺りやっぱり可愛げの無い女だが、涙声で腕を回してくるところは、やっぱり俺の選んだ最高の女だ。

なあ。

何？列車出るよ。

どうしてお前の作るベリートアルトはあんなに美味いんだ？
何さ、いきなり。

いや、気になってな。
そりゃあアンタ。

嫁さんは俺の顔を真っ直ぐに見つめ、今までで一番綺麗に微笑った。

隠し味に愛情がアホみたいに入ってるからさ。

普段なら、何を臭いこと言ってんだ、と笑い飛ばす所だが、今の俺にはこれ以上無い口説き文句になった。

もう一度、きつく抱き締め、行ってくる、とだけ伝えた。

それ以上は言えなかった。

うん、と頷いた嫁さんに背を向け、出発のベルに急かされて俺は列車に乗った。

俺は死ねない。

嫁さんが、子供が待ってる。

機密を国王へ届けて、平穏な暮らしを取り戻すんだ――。

「バイバイ」

最期にイーズの目に映ったのは、悲しげな色をしたジュノの金の目。

ああ、そんな目しないでくれ。

皮肉なもんだ。アンタの強気で明るい所に嫁さん重ねて、何度も救われてきたんだ。

ごめんなあ、フローレン。

完全に息が止まった事を確認して、細く息を吐いた。

情けなく震える指を叱咤して、安全装置を銃に掛けてホルスターに仕舞う。

気を抜けば座り込んでしまいそう。

黒いマントは夜の闇に溶け込んで、あたしの姿を隠してくれる。

顔の半分を隠すフードごと、前髪を掻き上げる。

汗でじつとりと湿った前髪が鬱陶しかった。

「……、残念、だわ……」

急に虚無感に似た気だるさを感じて目を伏せる。

「アンタの腕は、買ってたのに……」

一見無骨で庶民的だけど、物凄くおいしいベリータルトの味を思いだし、あたしは月夜の中で、無意識に唇を指でなぞっていた。

ウェルカム

酷く体が重かった。

羽織った真っ黒なフード付きのマントの裾から見え隠れするミリタリーブーツの爪先ばかり見つめていた気がする。

白み始めた空は薄暗くて、中途半端にあたしの姿を闇の中に隠している気がした。まあ、そんな事はある得ないのだけど。

ずいぶん前に入国した筈なのに、城は一向に近づく気配が無い。

ゆらゆらと揺れる蜃気楼のようで、まるで幻の様に綺麗だった。

：だいたい、丘の上にある事自体は間違いなのよ。

車ならすぐかもしれないけど、歩いて登るのはなかなか骨が折れるんだから。ちったあ考えたらどうなの？

八つ当たりの様に考えながら（実際口にはだしていたかもしれない）、それでも一步一步踏みしめる度にあたしの顔はジンジンと傷んだ。

イーズを追う間に負った怪我は顔面に食らった肘うちの一発で、乱射した弾はズボンのとマントの裾を貫いただけだった。

足に当たっていたら間違いなくあたしはイーズを取り逃していた。否、イーズは生き延びて、あたしは死んでいたかもしれない。

エース（今はマリアだっけ）やカノンはあたしに処罰を与えようとするとは思えない。

二人は救い用の無い甘ちゃんだから。

でも議会は違う。

王族の下にしながらにして王族に意見出来るだけの権力を持った議会は、間違いなくあたしをクビにする。

国家公務員をクビになるならいい。

でも、人をクビになるワケにはいけない。

イーズは間違いなく何かを掴んでいた。

だからコックを辞めて、国を出ようとした。

あたしは無意識に唇を噛む。

これは本当に正しい選択だったの？

イーズが逃げ延びて、自国に帰ったとする。

彼が愛しそうに語る奥さんの元に帰って、二人は幸せに暮らす。

諜報員なら機密を流す。

それが有益なら使わない手は無い。こんな小さな国、簡単に攻め込まれる。

それを火種に革命派が動き出したなら。

マリアとカノンは確実に殺される。

そんな未来は見たくない。

あたしはそんな理由で奥さん思いの彼を殺した。

でも、国が征服されたら国民はみんな捕虜だ。
どんな仕打ちを受けるかわからない。

ぐるぐる。

ぐるぐる。

ぐるぐるぐるぐるぐるぐる。

ああ、駄目だ。

思考なんて纏まらない。

吐き出しそう。

弱音とか、弱味とか、恨みとか、つらみとか、思い出とか、いろいろ、いろいろ、「ジュノ嬢？」

「……え、」

真っ黒なコートが目に入った。

大きな鞆を提げて、帽子を目深に被って、低い声であたしの名前を呼んだ。

「……ハーノ、ベル……」

「何があった？ 出血が酷いぞ」

主に顔の、と付け足す。

カノン相手にするのと態度が違いすぎない？とか、なんでこんな時間にいんの？とか、色々言いたいことはあったけど。

「…痛い、わ」

どうでもいいわ。

「慰めてよ」

ジュノが帰還したのは夕暮れだった。

昨日の夜に城を出て、夜が明けて、それでも帰ってこないジュノに何かあったんじゃないか、と考えては心臓を握り潰される様な感覚に苛まれていたのだけど、それは杞憂で済んだようだった。

足取りこそ重いが、特に怪我は無いらしい。

ほっ、と息を吐くと無意識に頬が緩んだ。

「ジュノ」

フードを目深に被ったジュノは僕の声で足を止めた。

おもむろにフードを取ると、あら、と呟いた。

対照的に、僕は息を吞んだ。

ジュノの顔には半分を覆い隠す程のガーゼが貼られていた。

「…ああ、これ？」

帰りにハーノⅡベルに会ったのよ」

「…ハーノールベル？」

「そー。アイツ城下に住んでるのねー。
家が近いから、って誘われてね、シャワー借りて、手当てして貰って、ついでに一杯引っかけて来たのよ」

遅くなりましたー、とふざけるジュノはまるでいつも通りだ。

よく見れば、頬が僅かに赤い。

「酔ってるのか…」

はあああ……と深くため息を吐くとけらけらとジュノが笑った。

「まあねー。」

大丈夫よ、仕事はこなしたわ」

ほら、と差し出された紙に急に現実に取り戻された。

そうだ、ジュノは、人を。

教えを、裏切って。

「言っておくけど」

酔っぱらいの癖に凜とした声でジュノが僕の思考を制した。

「猫はもういないの。」

確かにあたしの中にはいるけど、生き続けるけど。

猫はもういないのよ」

空気に吞まれて立ち尽くす僕に笑いかけて、ジュノはいつも通り

の声で言葉を紡ぐ。

「もういいかしらー？

そろそろ寝たいんだけど」

「…ああ。御苦労様」

有り難き幸せ、と茶化したジュノは僕の横を通りすぎていった。

一纏めにした髪からは知らないシャンプーの臭いがした。

ぼん、と肩口に押し付けられた紙は飛行機の設計図と信じられない額の領収書だった。

「……単価の高い酒ばっか飲みやがって……」

僕の嘆きは届かない。

マリアは上機嫌だった。

朝はすっきりと目覚め、天気も快晴。

素晴らしい日だ。

鼻歌でも歌い出しそうな軽い足取りダイニングへ向かう途中、マリアは微かな話し声に足を止めた。

辺りを見回すと、ちょうど中央階段の辺りでカノンとジュノが何やら話していた。

世間話、もしくは幼馴染み故の軽い悪態の応酬とはまた雰囲気が違うっていた。

何か暗く、重い。

ジュノが笑った。

美女が笑うのだから、美しい笑みなのだが、いつものような明るさは無い。

何か薄暗く、怪しい色香の様なものを纏った、遊女のような笑みだった。

マリアは小鳥の様に首を傾げる。

ジュノはあんな笑い方をする娘だったかしら？

失恋でもしてしまったのだろうか？

「それなら、話を聞けばいいんだわ」

そして励まして、新しい恋を応援しよう。

恋はいつになっても出来るけど、乙女の命は短いから。

最近読んだ雑誌の受け売りを呟いて、マリアは笑みを浮かべる。

しかし、ジュノは歩いて行ってしまった。

残されたカノンはカノンで押し付けられた書類を握りしめ呆然と立ち尽くし、ジュノの背中を見つめている。

その表情は酷く悲しげで、何か大切な物を無くしてしまった時のそれによく似ていた。

ラビット・ドリーム

懐かしい夢を見た。

昔の夢だ。

僕とジュノは6歳の頃、城に引き取られた。

別々の孤児院で育った僕等は名目上マリア様の遊び相手として城に呼ばれたのだが、後に僕は執事に、ジュノは諜報員になるために呼ばれたのだと後に知った。

怪盗団C i p・C a t sの生き残り、ジュノは身軽でずる賢く、そして何より可愛かった（その頃は、可愛かった）から、諜報員に選ばれるのも納得がいった。

だけど、どうして僕が、と疑問に思い、疑心暗鬼になった時期があった。

前置きが長くなったが、その頃の夢だ。

幼い僕が泣きべそをかきながら王女様に問う。

どうして僕なんですか。

ぼくは生まれてきてはいけない子で、いみごで、みんなふこうになっちゃうのにと。

王女様は僕の頭を撫でながら抱き締めてくださる。

あなただからですよ。

あなたは優しい子。あなたは聡明な子。

あなたは、あなたはとても――。

そうおっしゃって、王女様は美しく優しく、まるで聖母の様に微笑んだ。

気に当てられたみたいにはお、っと見とれた僕に微笑んで、ほら、お待ちかねですよ、と王女様はドアを優雅なしぐさで指した。

その指の指す先には、幼いマリア様とまだ髪の毛の短いジュノが部屋を覗き込んでいた。

手にはトランプが握られていて、マリア様は僕を手招きする。

王女様を振り返ると穏やかに笑っていらいて、小さく頷かれた。

僕は酷く嬉しくなって、幸せな気がして、泣きたいような笑いたいような気持ちで二人に駆け寄った。

差し出された手を握る為に手を伸ばして、手を、伸ばして――。

目が覚めた。

夢の続きの様に穏やかな気持ちで、ぼんやりと白い天井を見上げる。

なんとなく薄く息をはいて、瞬きをして頭を覚醒させる。

どうしてあんな夢を見たんだろうか。

霞がかかったような意識が覚めていくにつれて、僕は心に黒いシ

ミがじわり、と広がっていく様な錯覚を覚えた。

乾ききっていない絵の具の上にナフキンを広げた時に似ている。

僕はジュノを利用した。

ジュノの手を汚させて、僕は何ひとつしていない。

誇り高きChip・Catsの教えを破らせて、この国を守ろうとしている。

「――っ…」

歯ざしりをしたって、後悔したって、僕がやらせた事には変わり無いのだ。

きっとジュノは笑う。

何言ってるのよ、と笑う。

何でもない風に笑って全て隠してしまう。

その闇を救えるのは、僕じゃ、無い。

此れは、とある国家の超重要機密である。

女王エース（王女マリア）はある旅人を待ち続けていた。

旅人の名はアリス。アリスを失ったエースは眠らせていた人格を甦らせ、王女マリアと成り果てる。

これで継承式の謎は解かれたも同然。

国政に疎いマリアの変わりに、執事のカノンが国の実権を握って

はいるが、その力は長く国を治めてきたロイヤル・ファミリーの存在であってこそ物。

ロイヤル・ファミリーの血を引かないカノンでは十二分の力は発揮できない。

そして生まれる綻びは、美しい諜報員が繕っている。
時に血を浴び、時に色を纏い、時に人の道を外れて。

表向き女王エースの治める小さな国は、実はハリボテで繕われた危うい均衡によって動かされていたのだ。

…あの国と永久休戦同盟を組んでいる貴国にもいい話がある。
私の様な半端者をかくまってくれたほんの札だと思ってくれていい。

あの国は高い技術をいくつも持っている。それさえ手に入れば、貴国の世界征服も夢ではない。

考えてもみろ。

貴国が同盟を組んだ相手は誰だ？

…そう、女王エースだ。

だが今あの国を治めているのは誰だ？そう、執事だ。

それに、今や女王エースはいない。いるのは、

…いるのは、世間知らずのお人好し。箱入り娘の、マリアだ。

目の前の相手は、細い目を更に細め、低く笑った。

笑う猫は桃色（前書き）

遅ればせながら

東日本大震災・犠牲者の皆様のご冥福、被災者の皆様の1日も早い平穩、東日本の1日も早い復興を心よりお祈りします。

私も出来る限りのことをしていきたいと思えます。

久しぶりの更新になりましたが「Alice」第二章4話です。
目を通して頂けた嬉しいです。らお楽しみ頂けたら泣いて喜びます。

笑う猫は桃色

トラリア皇国――。

北の大国ブリッジスから近年独立したばかりの軍事国家。

大昔、領土拡大を図ったブルジ族に土地を追われた先住民族トラリアが宣戦布告し、自由を掲げて戦い、そして勝ち取った国。

まだ歴史は浅いが、皇帝を中心に順調な発展が続けている。

トラリア皇国と王国、同盟を組むだけの価値があるのかどうかを調査する、という名目で皇国までやって来たあたしは、無機質な印象を受ける灰色の壁の前でカノンの言葉を思い出していた。

『お呼びですかー、執事サマ』

『茶化するジュノ。：トラリア皇国、って知ってるか？』

『トラリア：ああ、北の』

『まだ小さいが将来力を持ちそうな気がするんだ』

『アンタが勘でモノを言うなんて珍しい』

『ああ。正直、これは賭けだ。』

独立したてで外交に疎いトラリアと手を組めば、王国は北に同盟国（兵隊）を持てるし、トラリアは後ろ楯を手に入れることになる。

：ジュノ』

『何？』

『見極めて来てほしい』

『：トラリアを？』

『ああ。お前の目で、トラリアを』

カノンの射抜く様な目。

いつからアイツはあんな目をするようになったんだろう。

トラリア皇国へ、王国から独立の祝い。

表向きそうなってるけどあたしの任務はトラリアの視察。

やってやろうじゃない。

国の未来はあたしが決めてやるわ。

カノンが根回しをしといてくれたおかげで門番の審査は簡単な審査でクリアした。

城からの迎えが着くまで門番と話をしたけど、この国の皇子様は国民に愛されているらしい。

内戦の多かったブリッジスの中で支配下に置かれ、虐げられ続けたトラリアの民達。従属時代の中に生まれ、独立の英雄として散った父の志を継いだ皇子は、自らも実力で勝ち取った国軍少将の座に座っている。

この国が軍事国家を名乗る所以でもある。

まだ外交が不安定な皇国において、軍は守ってくれる盾であり、他国を牽制する強みである。

しかし軍の独裁であってはならない。あくまで皇帝の国である。前皇帝の意志は今もしっかりと受け継がれている。

「お嬢ちゃん！お迎えだよ」

気のいい門番が手招く。

見ると、真っ赤な軍用のバギーがこちらに向かってくる。

「…あれ？」

「おうよ。国旗が見えねエか？」

「いいえ…。見えますが…」

軍用バギーって。

駐在する門番が揃って背筋を伸ばし敬礼する。

華麗にハンドルを切って縦列駐車を決めた運転手は、ドアを開けると優雅な仕草で服の乱れを直し、一礼をした。

薄手のジャケットをきっちりと着込んだ、白髪混じりの上品なオジサマだ。

背筋のピン、と伸びた佇まいは若々しい。若々しいけど。

「皇子様って…意外とお年を召してらっしゃるんですね…」

「はア？」

皇子様に敬礼をしたまま門番が眉を吊り上げた。

不躰な視線に気付いたのか、皇子様が苦笑する。

目元に寄った笑いジワがセクシー。

「執事のシャロームと申します。シャーリーとお呼びくださいませ。

本日、皇子は訓練の為お迎えに上がりません。主人の無礼、心より謝罪いたします」

執事さんだった。服装がカジュアルなのは彼自身も軍に所属しているからだろう。

ウチの堅物とは違い、丁寧な物腰だけどこか猛者の目をしてる。

「大変失礼致しました。

西の王国のジュノと申します。本日は皇子にお話を伺いたく参りました」

この日の為に仕立てた淡いピンクの質素な―――だけど上質な生地ของワンピースの裾をつまんで頭を下げる。

「お話は伺っております。ご案内致します。お荷物を」

会釈で了承の意を示す。にっこりと微笑みながら失礼します、断って荷物を持ち上げた執事さん、もといシャロームさんの目が一瞬鋭く光った。

一瞬すぎて気付かないくらい早く、荷物を揺らして中に武器が無いことを確認した。

シャロームさんが薄く息をはいた。

おあいにく様、と心中で舌を出す。

あたしはそんな所に獲物を隠し持ったりしないわ。

お迎えのバギーに乗り込み、悪戯っぽい顔で笑んでみせる。

「今日は皇子様にお会い出来ますか？」

執事さんも穏やかに笑む。

「夜には戻られますよ」

車を走らせること20分余り。

トラリア皇国の城はシンプルで実用的な造りだった。

王国と比べてしまっているのかもしれないけど、城と言うよりは基地といった感じだ。

シャロームさんの運転は実に優雅で、慣性もなく停止した。

玄関で待たせていた召使いらしき青年がドアを開け、爽やかな笑顔で出迎えてくれた。

荷物持ちを任されているらしい彼はあたしの荷物を軽々と持ち、ご案内致します、と腰を折る。

スカートをつまんで礼をし、わざとゆっくりとした歩幅で歩き出す。

数人のメイド達が揃って頭を下げる。

七分丈のシャツワンピースの下に黒いタイツを履いた彼女達の靴は、可愛らしいシルエットのスカートには武骨過ぎる軍用の編み上げブーツだ。

思わず立ち止まるあたしに、独立戦の名残です、と青年が耳打ちしてくる。

独立戦、とおうむ返しに呟き、一糸乱れぬ礼で魅せる彼女達に礼を返した。

唐突に青年が明るい声で話しかけてきた。

「ランチはお済みですか？」

「いえ、まだ…」

「でしたらすぐにご用意します！何がお好きですか？」

「いえ、私は結構ですわ。仕事がありますので…」

「しかし、それはもうコックが張り切って作ってしまひまして。

あ、これはアップルパイの匂いですね」

のほほん、と言う彼にそうですか、と笑顔を返しておく。

人の都合は関係無しですか、コックさんよ。

失礼にならないよう、アップルパイは好きですわ、と曖昧に笑う。

「でしたらお部屋までお持ちしましょう。

お仕事が一息付かれましたら召し上がってください」

「ありがとうございます」

それから一言二言他愛ない話をして、客間に通された。

大きな窓から青空が見える。

装飾は控え目で、落ち着いた雰囲気の中に然り気無い気遣いが光る。客間で落ち着けないなんて、ただの見栄でしかない。

シンプルな造りは好感が持てた。

青年が去ってからたつぷり5分待って、あたしは荷物を広げた。

銃は持ってきてない。

ナイフも基本的には持ってない。

鞆の中身はほとんどが書類と機械、それと数日の間滞在出来るだけの細々とした私物。

ピンヒールの革靴を脱いでヒールの低いトゥシューズに履き替える。

普段はそんなことしないんだけど、お嬢様育ちの調査員を演じる上が必要になるから、とカノンに持たされた。

薄いピンクの柔らかい革は如何にもお嬢様、って感じであたしに

は似合わない。

似合わない過ぎて笑えてくる。

笑ってても仕方無いので日記帳に見せかけた記録用紙を開き城の様子を記す。

監視が無いのは確認済みだけど、あくまで日記風に。

『×月××日、快晴。

トラリア皇国に入国した。

春のクマバチ達の群れ、女王バチは忙しく動き回っている。

人が温かく、とても素敵な造りのお部屋に泊めて頂ける事になり、大変光栄である。

日記を記している今はまだ皇子様にお会い出来ていない。

夜にお会い出来るらしい。今から胸が高鳴っている。』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4774h/>

Alice,

2011年10月9日19時08分発行